

---

# 希少保護生物指定女子。

葉名

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

希少保護生物指定女子。

### 【Nコード】

N0980Z

### 【作者名】

葉名

### 【あらすじ】

……おかしなことになりました。翌日のテスト勉強に飽きて世界史の教科書を枕に居眠りした女子高生・夏妃は、目覚めると見知らぬ森の中にいた。そこで出会ったのは森のクマさんではなく、大きな図体のドラゴンさん。黒髪イコール黒龍のお子様と勘違いされ、自分は人間だと訴えるも、「ニンゲンとはなんだ？」と不思議がられる始末。どうやら目覚めた場所は人間の存在しない世界であるらしかった。この世にたった一人のヒト科女子、希少生物に指定され、ドラゴン（龍）に保護されています。

## 1（前書き）

初登校です。いや投稿です。

拙く、文章にお見苦しいところもあるかと思っています。気になるころがあればご指摘いただければありがたいです。

それでは、サバサバ異世界ライフ目指して、行けるところまで行ってみます。

寝起きの耳に届く小鳥のさえずり。梢を揺らす風の音。

こんな「THE・爽やかな朝」とタイトルが付きそうな目覚めは、15年の人生で初めてだ。

とはいえ、あんまり気分はよくない。柔らかいといっても土の上に寝そべっていたので全身がちがだし、髪の毛にも土や落ち葉がくっついていて。どちらかといえば不快だ。

やれやれと体を起こして背中やら髪やらを払う。頭上を仰ぐと、枝葉の間からまだ弱々しい陽の光が差し込んでいた。

さて、と夏妃はこ<sup>なつき</sup>こでようやく現状を確認する気になった。

そのいち。着ているものは部屋着代わりのくたびれたTシャツとジャージ。これは記憶にある通りだ。風呂上りに着て、部屋に戻ったそのときのまま。

そのに。たつた今まで自分の頭があつた位置に、付箋を貼られた本があつた。サイズはA5版。それなりの厚さで、枕にちょうどいい。タイトルは、『新版世界史B』。これも覚えている。明日が高校に入つて最初の定期試験で、その初戦が世界史なのだ。いや、もう「今日」だろうか。とにかく、夏妃は徹夜でその追い込みをしていた。

そのさん。周りを見回してみる。濃い緑色をした広葉樹が生い茂り、下草も勢いよく繁茂している様子はまさに初夏の森の中、といった様子だ。しかし、こんな場所には覚えがない。夏妃は自分の家の、自分の部屋にいたはずなのに、一体何がどうなつてこんな場所

にいるのか。

着ている服と世界史の教科書のほかは自分の持ち物らしいものが見当たらず、靴さえ履いていない。まあ、部屋の中にいたのだから当たり前だけれど。とりあえず教科書を拾い上げて付いた汚れをばたばたと払った。それをなんとなく胸に抱えて、考え込む。

さて、これからどうすべきか。

この森が深いのか、それとも人里に近いのかもわからない。迷子になったときの基本といえば「その場から動かないこと」だけれど、夏妃を迎えにくる人物などいるのかどうかの問題だ。そもそも誰が何の目的で、こんな真似をしたのか。

頭に巢食う嫌な想像を追い出すべく、すーはーと大きく息を吸って吐いてみる。できるだけゆっくりと、吸うよりも吐く時間を長く。気持ちを切り替えるときに有効だと、何かの折に教師が言っていた方法だ。気休めみたいなものにもすがりたい心境だった。

ばくばくいつていた心臓が落ち着きを取り戻してきたところで、とにかくこの最初の場所を見失わない程度に森を探ってみよう、と決めた。じっとしていても怖い想像が膨らむばかりで良いことがない。迷ったら行け、が夏妃の信条である。

しかし。

自分を奮い立たせて腰を浮かせたその時、地響きが聞こえてきた。地震？と動きを止めたが、確実に大きくなるそれは規則的で、何か意志を持ったもののように思えた。例えばそう、SF映画で怪獣が歩く音がこんな感じではなかったか。

ある日、森の中。

ふと、童謡のメロディが頭に浮かんだ。緊張感のなさに自分で呆れたが、もしかしたら防衛本能なのかもしれない。逃げようという気にもなれず、中途半端な姿勢のまま音のする方向をじっと見つめる。さつきせつかく収めた動悸がまた耳についた。

やがて、視線の先の木立から小鳥が一斉に飛び立つ。甲高く鳴き交わす声と木が軋む悲鳴のような音とともに、森の奥から現れたのは。

どの樹木より高い背丈。眼光鋭い大きな眼。鹿に似た銀の角は美しく、体を覆う翡翠色の鱗とともに朝日をはじいて光る。

夏妃は、我が目を疑いながらぽかんと口を開けた。

途方もなく巨大なその姿は、残念ながら【森のくまさん】ではなく。

「森色のドラゴンさん……？」

目覚めた見知らぬ森の中。夏妃が初めて発したのは、そんな気の抜けた台詞だった。

呟くような声だったはずだがよほど聴覚が鋭敏なのか、ドラゴンはぴくりと片耳を動かし、確実に夏妃を見つけた。

夏妃のこぶしより大きいであろう眼に捉えられてさすがに危機感を覚える。

ドラゴンはぱしぱしと瞬きすると、さらに夏妃のほうへ近づいてきた。騒々しく音を立てて折れる枝葉の様子が不安を煽った。

幸い危惧したように踏みつぶされることなく、代わりにはるか高みにあったドラゴンの頭がぬつと降りてきた。間近で見る焦げ茶色の瞳は意外に穏やかで、心臓が引きつりそんな恐怖がわずかに和らぐ。

どちらにしろ、ここまで近づかれたら逃げる暇などないだろう。

諦め半分、興味半分で目の前の巨大な顔をじっと見てみると、ドラゴンはやけに可愛らしいしぐさで首を傾げた。

「驚いた。君は、黒色かい。<sup>くろいろ</sup>そんな珍しい仔が生まれたなんて話は聞かなかったんだけどな」

びつくりして、ぱくぱくと口を動かすが声にならない。信じられないが、絶対にこのドラゴンが喋っていた。恐ろしく歯並びのいい口が合わせて動いていたし、声もそこから聞こえてきた。

穏やかで呑気そうな声は若い男性の声に聞こえた。それがドラゴンから、しかも日本語で聞こえてくるとというのが解せない気がする。恐怖より興味が勝って、つい言葉が漏れた。

「ドラゴンって喋れるんだ。RPGみたい」

「……喋らずにどうやって意思疎通するんだい？ あーる……って何だ？」

訝しそつにだが、ドラゴンはちゃんと応えてくれた。どうやら言葉は正確に通じているようだ。いきなり喰われる心配もないらしいと分かってほつとした。

「RPGっていうのはロールプレイングゲームの略で、勇者が魔王やらドラゴンやらの大ボスを倒すのがだいたい最終目的な感じのゲームですよ。ゲームの中でなら、ドラゴンが喋るのも不思議じゃないんですけどねえ」

安堵したついでにぺらぺらと説明を加えてみたが、ドラゴンは首をひねるばかりだった。

「おかしいことを知ってる子どもだなあ。それは新しい発明か？ 君は大陸のほうから来たの？」

「出身は極東のちっちゃい島国ですけど、その大陸っていうのは……あー、ちょっと待ってください。首が痛くなってきた」

頭を仰向けて話しているのがつらくなって、首の後ろを手で揉みほぐす。すると、ドラゴンはたった今気が付いた、というように瞬いた。

「そつか、すまない。この姿では話しづらかったな」

そう言うなり、ドラゴンの姿が掻き消えた。今まで見えていたのが幻だったんじゃないかというほど、それはそれはあっけなく。

あまりの事態にまさかおかしいのは自分の頭なのでは……と不安に襲われていると、「こっちこっち」と緊張感のないドラゴンの声



がした。がさがさと藪の中から現れたのは、背の高い若い男。思わず素で訊いていた。

「どちら様ですか？」

「は？ さっきまで話してた相手を忘れたの？」

きょんととして返された声は、確かに緑色のドラゴンと同じもの。

「……小さくもなれるんだ」

もはや諦めの境地で力なく呟く。

不可解そうに首を傾げる青年のしぐさは、ドラゴンと同じだった。

緑色がかった濃い銀色の髪は見たこともない不思議な色合いで、目を引いた。整った顔立ちは東洋風だが、焦げ茶の瞳は日本人とは比べ物にならないほど明るく澄んでいる。簡素なシャツとベストとチノパンぽい服装だけでは、なに人なのかわからない。

この青年がさっきまでドラゴンの姿をしていただなんて、まったく正気の沙汰ではないと思うのだけれど。

「変化も知らないなんて、変な子だなあ。龍ならどんな親でも教えることなのに。見たところ尻尾も牙もないし、眼も銀色じゃないし。君は龍だよな？」

ものすごくおかしいことを聞かれた。とっさに反応を返せないほど驚く。

「……いやいや、まさか。私はただの人間ですよ」

まったく、とんだジョークのセンスだな、と思っていると。

「ニンゲン？ ニンゲンって何だ？」  
「はあ？」

その反応こそなんなんだ、と相手をじっと見るが、「冗談を言っている風では全くない。

つまり何か。このドラゴンさん、いや自分で龍って言うてるから龍さん？ の知る限り「人間」なる者はいない。つまりここは、人間の存在しない異世界だとしても？

……。

特撮物の怪獣よろしくでつかい生き物が現れた時から嫌な予感を感じていたけれど。幸か不幸か、どうやら定期試験の心配をしている場合ではなくなったらしい。

いや絶対、幸ではないけど。

これはおかしいことになった。と、ここではじめて真剣に考えた。とりあえず、まずは確認せねばなるまい、と真顔で両頬をつねってみる。青年は目をぱくりさせた。まあ、気持ちはわかる。

けっこうな力を込めてみたが、痛いだけで目が覚めることはない。

結論。

「これは現実で、私は人間が存在しない代わりに龍は存在するへんてこな異世界にいる」

口に出してみると、こんなバカな話があるか、という気分になった。苛立ちそのままに青年を見た。

「ここはどこ？ 国とか地域とか、名前はあある？」

青年は戸惑った風だったが、すぐに答えてくれた。

「ここはシルウア島の東、緑龍の村の近くの森だ。島は龍族の王が治める龍の国の配下にある。国の名はない」

「さっき大陸がどうか言ってたけど、大陸の名前は？」

「俺は知らないな。もしかしたらあるのかもしれないけど、大陸は一つきりだから『大陸』と呼ぶだけで用は足りてる」

やはり、夏妃の知る世界とは違う。無駄なことだと知りながら、手にした教科書の最初のページを開いて彼に見せた。

「この世界に、この地図と似たところはある？」

細かく国名が書き込まれた世界地図をもの珍しそうに覗き込んで、しかし青年は首を振った。

「いや、こんな形の島も大陸も見ることがない。ここに書き込んである模様は文字なのか？これも見たことがないよ」

決定的だった。教科書を閉じて、だらりと手を下ろした。混乱を乗り越えて、やけに冷めた頭で考える。なぜ、こんなことになったのだろう。

半ばやけ気味に、青年を睨むように見て訊ねた。

「貴方から見て、私はどう見えます？」

青年はあっさりと、けれど真摯な口調で答えてくれた。

「ニンゲンとやらは知らないが、俺には君は龍に見えるよ」

まったく、何の冗談なのだか。ファンタジーな生き物にお仲間認定される日が来てしまうとは。

はつきりとした青年の答えを聞いて、むしろ肩の力が抜けた。ため息をついて、まずは彼に向かって頭を下げた。

「ごめんなさい。混乱して、失礼な態度を取りました」

完全に八つ当たりだった。彼に嘘やごまかしを口にした様子はないし、相手にしてみれば寝耳に水の話だったろう。

それでも青年は柔和に微笑んだ。

「いや、気にしてないよ。ただちょっと確認したいんだけど、君は本当に龍じゃないの？」

「違います。だいたい、貴方みたいに変身とかできないし」

「それは幼いからでは？ 成獣前に変化できないことはそうおかしいことじゃないよ」

そついつ認識になるのか……。というか。

「あの、龍に換算すると私っていくつくらいに見えるんですか？」

彼の言い方だと完全に小さい子ども扱いに聞こえるのだが。

青年は夏妃を上から下まで眺めて、おおざっぱにだけど、と前置き付きで答えた。

「だいたい、生まれて5、60年つてところかな」

.....はい？

「……えつと、龍の成人、いや成獣？つて生まれて何年くらいですか？」

「まあ個体差はあるけど、100年前後だよ」

つてことは、100歳が20歳だと換算して、えーと100:50=20:xとすると50歳は10歳？（キリのいい数字で助かった。計算は算数時代から死ぬほど苦手だ。）

『さすがは龍、とんでもない長寿だな』と感心するべきか、『え、10歳？ほんとに子ども扱い？』と戸惑うべきか悩む。

本当の年齢を説明すべきだろうか。でも15歳つて龍だと幼児なのでは。それはさすがに、ものすごく嫌だ。迷ったが、あとで都合が生じても困るので、やはり説明を試みることにした。

私は15歳です、でも人間と龍の年の取り方は違うようなので、私は龍で言う75歳（これはちよつとタイムをもらつて地面と小枝で筆算した。重症なのは自覚している）くらいだと思ってください、と訴える。さすがに驚いていたけれど、なるほどそうなんだ、と一応は頷いてくれた。

「それで君は、どうしてこんなところに？」

最も答え辛い質問だった。うまい言い訳も思いつかず、正直に答えるしかないかと腹をくくる。

「それが、気が付いたらここにいたんです。居眠りする前は自分の家にいたはずなのに、どうしてこんな場所にいるんだかさっぱりわからなくて……」

怪しいことこの上ないのは自分でも承知している。勝手に語尾が小さくなった。さすがに不審者扱いされても仕方ないだろう、と覚

悟したのだが、青年の反応は予想と違っていた。

「じゃあ、迷子なんだね？行く当てがないなら、とりあえず俺の村において。知らない場所に一人で、心細かっただろう」

驚いた。初対面の、自分を「ニンゲン」なる未知の生き物と名乗る不審者発言ばかりの相手に、なんという能天気…いや、親切な申し出なのか。

一瞬やっぱり実は悪党で何か企んでいるのでは…と疑ったほどだ。とはいえ、彼の表情に不自然なところはないし、純粹に親切心から出た言葉なのだろう。

子ども扱いなのは気になるが、龍の基準からすれば庇護すべき子どもにしか見えないのだろうから重ねて否定はしない。それに言うまでもなく、ありがたい申し出だった。

「それは、助かりますけど…。でも、ご迷惑になりませんか？」

飛びつきたいのはやまやまだが、常識的日本人として一度遠慮しないわけにはいくまい。ここでうん迷惑だけど、とか言われたら窮するところだが、青年はお人よしスマイルで否定してくれた。

「まさか。困っている君を放っておくほうが非常識だろ？」

異世界でも人道は生きているんだなあ…とほっとした。いや、人はいない世界のようにだけど。今度こそ、ありがたくお言葉に甘える。

「ありがとうございます。お世話になります」

うん、とうなずいて、青年が夏妃に近づいてくる。なんだろう？と思っていたら、急に体が浮いた。いや、超常現象とは違う。青年

に抱き上げられたのだ。しかもまさかのお姫様抱っこで。

「え、え？」

事態に追いつけずに言葉が出てこない夏妃に、青年は呑気な笑みを向けた。

「裸足のまま森を歩いたりしたら危ないでしょ」

「い、いやでも私重いし」

そのうえ死ぬほど恥ずかしい。

「君は羽根みたいに軽いよ。大丈夫、村はすぐ近くだし」

一度は言われてみたかった台詞だが、喜べない。だってこの青年は龍なわけで、相当な重量さえ軽々と持てるんだろうし（想像だけ）。そもそも、羞恥プレイなのに変わりはない。

親切なのは確かだが、どうにもこの青年はズレている。お人よしを絵にかいたような微笑みも、背後になんだかお花畑が見えそうだし、せつかく見目はいいのに天然なのか？ 龍がみんなこんな感じだったらどうしよう。

と思い悩んでいたら、「あ、そうだ」と青年が思い出したように夏妃を見た。ち、近い、顔が近い。

「そつえば聞いてなかったな。君、名前は？」

失念していたのは夏妃も同じで、はっとした。恩人に名乗ってもいなかったなんて失礼この上ない。

「申し遅れました、椎名夏妃です。夏妃が名前、椎名が苗字」



「シーナ・ナツキ？　へえ、素直ないい響きだね」

それはどうも。ところで貴方は？と聞くと、

「俺はウィリディスアルゲントウムサルトゥスルーナ」

じゅ、呪文？

固まった夏妃に苦笑して見せて、青年は付け加えた。

「が本名だけど、不便だしあまり使わない。みんなウィルって呼ぶよ」

「じゃあ私もウィルさんと…」

フルで呼べと言われても無理だ。安堵が顔に出ていたのだろう、彼が微笑ましそうにくすりと笑う。

「さんもいらない、ウィルでいいよ。やっと成獣したところだし、敬語や敬称はむず痒いんだ」

いやいや、100歳は立派に敬われる対象ですよ。と言ったところで仕方ないんだよなあ、やっぱり…。

「習慣なので、今はこれをお願いします。だんだん直していくので…」

ということと納得してもらおう。ついでに、本当に重さなど感じていないかのようにさくさくと森を進んでいく彼に念を押すことも忘れなかった。

お願いですから、村に入る前に下ろしてくださいね。誰かに見られると恥ずかしいので！！

ウィルは不思議そうにしながらも頷いてくれたが、たぶんお年頃のオンナノコの葛藤なんて理解してないだろう。  
気疲れしながら、前途多難、と口の中で呟いた。

### 3（後書き）

一章は現状確認に終始しました。  
計算無能力者は作者のほうなので、ミスがあればご指摘ください。  
ほんとに算数からためなので。

約束通り村の入り口近くで下してもらい、木立の間から村のほうを伺う。木組みの家々が並び、窓辺には花が飾られた静かな村で、雰囲気は旅番組で見たドイツの集落に似ていた。

「それで、私はどうしたらいいの？」

隣に立つウィルを仰ぐ。獣型の時ほどではないにしろ、かなりの身長差なのでつらいものがある。それに気付いたのか、身をかがめてウィルが応えた。

「少しここに隠れて待つて。村長に事情を話して、君を受け入れてもらえるよう頼んでくる。君は龍族にしか見えないし、その黒髪では目立つから、俺が戻るまで誰かに見られないように気を付けて」

不安が顔に出たのだろう、ウィルは宥めるように笑って見せた。

「大丈夫、龍は情け深い子ども好きだ。君の境遇を聞けばみんな受け入れてくれるよ」

いろいろと複雑なものはあるが、頷いておく。夏妃の頭を撫でてから、ウィルは木立から出て村へ歩いて行った。彼を見送って、息をつく。

身を隠した木の幹に背を預けて頭上の梢を仰ぐと、木洩れ日がちらちらと平和に踊っていた。全部が嘘みたいだ。嘘だったら、良かったのに。

もうひとつため息を落としたところで、近くの茂みが音を立てた。びくりとして、幹を回って身を隠す。

ウィルの忠告が頭の中をぐるぐる回る。まだ、誰かに姿を見られるわけにはいかない。

しかし、続いた犬の鳴き声と現れた小さな影に虚を突かれた。

腕に仔犬を抱いたその小さな男の子は、目を真っ赤にして鼻をぐずぐずいわせていた。ぽてぽてと歩く足元はいかにも危なっかしく、案の定、木の根に足をひっかけてべしゃつと転ぶ。若葉色の目に見る見る新しい涙が浮かび、抱いたままの仔犬が男の子と地面の間に挟まれて哀れっぽく鳴いた。

夏妃は見えていられずつい身を乗り出してしまい、やばい、と思ったのは男の子としっかり目が合ってからだった。硬直する夏妃を見て、男の子はきよんとした。

「おねえちゃん、どうしてはだしの？」

え、そこ？

いやいや、それより仔犬が可哀そうだよ。いよいよ苦しそうだつて。

仕方なく歩み寄って、男の子を助け起こす。ごみを払ってやった髪はウィルよりも色が淡い銀緑色だ。

男の子は人見知りをするように夏妃から距離を取って、おどおどとこちらを伺う。今さらだなあ、と思いながら夏妃は内心、困り果てていた。実は子どもはちよつと苦手なのだ。

とりあえず、じゃあこれだというわけにもいかないので、穏便に話をすることにする。

「ええと、大丈夫？ どうして泣いてたの？」

男の子は口ごもってぎゅっと仔犬を抱きしめる。だから苦しそうだっば。

「その仔犬は？」

話のとっかかりのつもりで訊いてみると、男の子は急に慌てだして仔犬を隠そうとした。

「ち、ちがうよ！ ないしょでかつたりしないよ！」

……うん、状況がつかめた気がする。

おそらく彼は拾った仔犬を飼うことを親に反対されたのだろう。そして、諦めきれずに仔犬をかくまえる場所を探していたと。こういう一生懸命なおバカさんは嫌いじゃないよ。

生暖かい気持ちになりながら、しゃがみこんで男の子と視線を合わせた。

「お母さんにだめって言われたんだ？」

男の子はどうしてわかるのか、と言わんばかりに目を大きくして夏妃を見る。そんな畏怖の目を向けられるようなことでもないんだけどね。

彼はぽつぽつと、小さな声で答えた。

「さつきもりであつたの。ひとりぼっちでかわいそうだから、おうちにいれてあげたかったのに。おかあさんはもとのところにもどしきなさいって……」

言いながら、再び涙目になる。

そう聞くと、なんだか仔犬と自分の現状がよく似ていることに気が付いた。夏妃も森でウィルに拾われて『抱っこ』されて連れてこられたわけだし。……思い出すと羞恥で悶えたくなる記憶だけど。

男の子の腕の中の仔犬は、むくむくの灰色の毛並みに琥珀色のつぶらな眼をしていた。ぴんと耳が立って手足が大きめなところはシベリアンハスキーに似ていなくもない。

夏妃はじつくりと男の子と仔犬を見比べながら考えた。  
そして、おもむろに提案する。

「じゃあさ、その仔を私に預けてくれない？　これから村長さんに会いに行くの。お母さんがだめっていうなら、私が村長さんに頼んであげる」

「ほんと？」

途端に目をキラキラさせて、男の子が夏妃を見上げた。

「あれ？」

ウィルが戻ってきたとき、夏妃はちょうど男の子から仔犬を預かって胸に抱えたところだった。

「あ、おかえりなさい」

「どうしてティリオとナツキが一緒に？」

不思議そうに首を傾げながらやってきたウィルを見て、男の子は逃げるようにしゃがみこんだ夏妃の影に隠れた。

「ティリオ。オレアがお前を探し回っていたぞ」

「……知らないもん」

ぎゅっとTシャツの肩口を掴む彼の頭を撫でて、夏妃は立ち上がった。

「君はいったんお家に帰りなよ。この仔はちゃんと私が守るからね？」

「……うん。やくそくだよ、おねえちゃん」

「うん、約束」

笑いかけると、ようやく男の子も笑みを返してくれた。ウィルが驚いたように二人を見比べている。

「何があつたんだ？」

「ないしょー！」

男の子は宣言して、木立から駆け出て行った。夏妃に向かって手を振りながら走る彼はやっぱり危なっかしい。また転ばないといいんだけど。

ウィルに視線を転じると、不思議なものを見るような眼と視線が合う。とりあえず先手必勝で謝ることにした。

「ごめんなさい、隠れてただんだけど見つかつちゃって」

「いや、それはいいんだけど。あいつ、ひどい人見知りなのにナツキにえらく懐いてたね」

「それはたぶん、内緒の約束の威力です」



「内緒つて、それ？」

指差された仔犬は、琥珀色をした真ん丸の眼でウィルを見上げてきゅんと吠えた。

「あの子、テイリオくんだっけ？ お母さんに飼うのを反対されて困ってたみたい。飼えるように村長さんに頼んでみようと思って」

ウィルはなんだか複雑そうな顔になった。

「でもナツキ、たぶんそれは……」

止められることを察して、彼の言葉を遮る。

「約束したんだもの、頼むだけ頼んでみるよ。村長さんには会えることになったの？」

「ああ、うん。もう待ってるよ」

「じゃあ行きましょう。この仔のこと話さなくちゃいけないし」

物言いたげではあったが、ウィルは重ねては何も言わなかった。彼はまたお姫様抱っこを申し出たけれど、それは丁重にお断りした。今は教科書のうえ仔犬も抱いていますので。仕方ないです。

村長の家は、両隣の家と比べても特に変わったところのない木組みの建物だった。目印を挙げるとすれば、玄関の上に掛けられた緑色の龍をかたどったモチーフくらいだ。

ベンチが置かれた広場のような空間に面しているので、早朝とはいえそれなりに視線を集めている。夏妃は、ウィルが用意してくれた藍色の頭巾のようなもので髪を隠していた。これで「黒色」なのはわからないはずだが、視線を痛いほど感じる。

ウィルが玄関のドア横についた紐を引く。中からくぐもったベルの音がしたので、それが来客を知らせるチャイムのようなものなのだろう。間もなく、ふくよかな体格の女性がドアを開けて快活に出て迎えた。

「いらっしやい。待ってたよ、さあ入って入って」

彼女がてきぱきと招き入れてくれたおかげで、不特定多数の視線から逃れられてほっとした。女性は夏妃に目を向けると、腕の中の仔犬に気付いて愛嬌のある深緑の瞳を少し大きくした。

「おや、どこかで見たようなルヴトだね。ティリオが拾ってきたのによく似てるが」

ルヴトというのはこの仔犬のことに違いない。いきなり核心を突かれてぎよっとした。身構える暇もなく、彼女は破顔して気安く夏妃の肩をたたいた。

「なるほどね。道理で戻ってきたあの子の機嫌が良かったわけだ。」

宥めるつもりで待ち構えてたオレアは拍子抜けしてたが」

「あ、あの……」

「はじめまして、お嬢ちゃん。私のことはシルエラと呼んでおくれ。ティリオは私の孫なんだ」

え、と驚きが声に出た。彼女は40代の半ばほどに見える。龍の結婚適齢期がいくつなのか知らないが、夏妃の感覚からすればいぶんと若いおばあちゃんだ。

「ウイルから大まかな事情は聞いてるよ。さあ、このタオルで足をふいて。怪我はないだろうね？」

甲斐甲斐しく世話を焼かれて対面の身支度を済ませると、シルエラが一つ頷いた。

「よし、これでいいね。長が待つてるよ、こっちへおいで」

隣りのウイルに促されて、すたすたと廊下の奥へ歩き出した彼女に続いて部屋に入る。向かって左手にあるテーブルセットに座る老人が立ち上がり、笑顔で彼らを迎えた。

「よく来たね」

ウイルが頭を垂れ、挨拶した。

「無理を聞いていただき感謝します。申し訳ありません、こんな時間」

「いやいや、若い者の訪問を受けるのはどんな時でも嬉しいものさ。年寄りになると寂しくていけない」

夏妃は村長の顔を見つめてぼかんとしていた。

「村長」と聞いて夏妃が勝手にイメージしていたのは、白いひげを垂らした気難しそうな老人だった。たぶん、RPGやファンタジー小説の先入観があったのだと思う。

しかし、実際に目にした「村長」は全くイメージとは違っていた。

淡く緑色が残る白髪はきちんと手入れされ、上品なラベンダー色のシャツとワインカラーのベストを着こなす姿はまさに老紳士と呼ぶにふさわしい。背も高く、無駄のない身のこなしと相まって、さぞかし若いころは美男子だったのだろうと思わせる。

窓から差し込む光で金緑色の瞳が深みを増す。目が合うと思わずどきりとした。刻まれた皺さえ魅力的な、映画俳優並みの彼の佇まいに息を呑んだ。……男性の色気というものはじめて実感した気がする。

呆けている夏妃に、村長はゆるやかに近寄ってきてにこりと微笑んだ。

わあ、悩殺。じゃなくて。

「は、はじめまして。椎名夏妃と申します」

「はじめまして、ナツキ。私はこの緑龍の村で長を務めている者だ。名は、エルヴァデゼジアルパスヴェルデヴィラ。エルヴァと呼んで欲しい」

エルヴァは夏妃とウィルを促して長椅子に座らせた。二人の向かいに彼が腰かけると、シルエラが人数分のお茶と、グラタンに似た料理をそれぞれの前に並べた。ほかほかと湯気を上げる料理を見ているうちに、ようやく空腹を自覚した。腕の中の仔犬も物欲しげにくうんと鼻を鳴らす。

「さ、お前さんのご飯はこっちだよ」

シルエラが夏妃から仔犬を抱きとる。テーブル脇に置いたミルク皿の前に下ろすと、仔犬は夢中で食事にありついた。

エルヴァが声に出して笑い、夏妃たちを見る。

「君たちもどうぞ。遠慮せず、年寄りの食事に付き合ってくれないか」

彼の自然な紳士ぶりには本当に頭が下がる。この短時間でファンになりそうだ。

ちらりとウィルを伺うと、彼も微笑んで頷いてみせる。ではありがたく、と教科書を膝に置き、頭巾に手をかけて背中に落とした。

ほう、と息をつく音がふたつ部屋に響く。視線を上げると、エルヴァと傍らに立つシルエラが感嘆の眼差しで夏妃を見ていた。

「……これは、驚いた。本当にきれいな黒色だ」

「ええ、こんな色にお目にかかる日が来るとはねえ」

たじろぐ夏妃と目が合うと、二人は我に返って慌てた。

「すまない、不躰だったね」

「いいえ。ご飯、いただきます」

ごまかすように笑って、フォークを取り上げて料理に手を付ける。失礼にならない程度に観察してみたが、こんがりと焼けたチーズの下野菜はブロッコリーやジャガイモに似ていて、味もそう変わらなかった。しいて言えば、知っている野菜より柔らかくて甘みが

強いことくらいか。

シルエラと目が合った。

「すごくおいしいです」

素直にそういうと、シルエラは応えて嬉しそうに笑った。

「そうかい。食後にケーキもあるからね」  
「楽しみです」

ほのぼのと食事を進めて人心地つくとお茶を一口飲んでテーブルに戻したエルヴァがさて、と切り出した。

「さっそくだがナツキ、詳しい話を聞かせてもらってもいいかな」

途端に緊張が舞い戻ってきて、固い声で答える。

「はい」

「緊張しなくていいよ。君のわかる範囲で構わないから」

柔らかな言葉には彼の気遣いを感じる。それでも、荒唐無稽だと自分でも思っ話を語るのは簡単ではなかった。

たどたどしく経緯を話すと、エルヴァは難しい顔になった。

「この世界の者ではない、か。私もニンゲンという種族のことは聞いたことがないな」

「そうですか……」

見るからに博識そうなエルヴァでさえ知らないということは、この世界に人間が存在する可能性はゼロに等しいと思っていだろう。異国人の見た目とはいえ、龍族の彼らの容姿は夏妃の知る人間にしか見えないのだから、悪い冗談のようだ。

申し訳なさそうに、エルヴァは眉を下げる。

「ニホンという名の国も、おそらく存在しないだろうな。大陸の境界のほうや魔族、妖族との交流は少ないから彼らの領域ならわからないが」

「でも、ナツキは龍族にしか見えないんですよえ」

シルエラが注ぎ足していつてくれたお茶を口に運びながら、やはり深刻味のない声で言ったのはウィルだ。

「私から見たら龍族のみなさんこそ人間にしか見えませんよ」

巨大な龍に変身しなければの話だけれど。

エルヴァは考え込むように顎に手をやった。

「それなら、ニンゲンと我々には何か近いものがあるのかもしれないな。……ナツキ、君は元の世界の地図を持っていると言ったね」

「はい。これです」

教科書を広げ、世界地図のページを開く。

エルヴァと一緒にウィルも覗き込み、二人して唸った。

「大陸の数も形も、表記文字も違う。やはり、別物の世界だと思うたほうがいいだろうな」

「それにしても、こんなにたくさん国があつてよくまとまっているな。それぞれに王がいるのか？」

ウィルに訊かれ、夏妃はそう多くない世界史の知識を絞り出す。

「この本は世界史の教科書なので、乗っている地図も昔の国の様子を表しているんです。今は植民地から独立したりして、もっと細かく分かれてますよ。王制じゃない国もたくさんあります」

「シヨクミンチ？」

「ええと……。強い国が弱い国の資源とか土地とかいろんなものを目当てに、軍事的に攻め込んで支配下に置いた土地、かな。昔は少ない列強が、世界中の地域を分割して支配してたみたいです。すみません、あんまり詳しくは知らないんですけど」

自信のなさが勝手に語尾を小さくする。

「では、王制じゃない国というのは？」

「いろいろですね。議会が権限を持つて統治してたり、国民が選挙で選んだ代表が政治のことを決めてたり。私の住んでいた国は、国民の代表である国会が国家権力の最高機関だと認められている、議会制民主主義ってやつでしたね」

「……難解な言葉が多いな、ナツキの世界は」



半ば呆れるようにウィルが呟いた。興味深そうに聞いていたエルヴァは、真剣な顔で頷く。

「しかし、ナツキの話は筋が通っている。理にかなった政治形態もある、かなり先進的な場所なのに違いはない。この世界にそこまで進んだ文化があるのかはわからないが……」

エルヴァの金緑色の瞳が夏妃を見て和らぐ。

「ナツキ。帰る術が見つかるか、この世界にほかの居場所を見つけるか。その時が訪れるまで、この村で暮らしなさい。我々が君を保護しよう」

「保護？ …… ちょっと、待ってください」

夏妃は抱えていたカップを慌ててテーブルに戻した。

「私が言うのも失礼ですけど、不用心すぎませんか？ 私が異世界人だなんて根拠も、嘘をついていないっていう保証もないでしょう。今の話を全部信じるんですか？」

「信じがたいのは確かだよ。異世界や君の言うニンゲンというものの存在も、俺たちには知りようもない」

やんわりと答えたのはウィルで、夏妃は彼に視線を移した。

「なら、どうして『人間』だなんて言い張る私を受け入れてくれるの？」

「知らないからだよ」

思ってもみなかった答えに、声を失う。ウィルは、飽くまで能天気そうに微笑んだ。

「俺も村長も世界の果てまで知ってるわけじゃない。知らない場所のどこかに君が言うニンゲンの国があったって不思議じゃないだろう。あるいはどこかで、ナツキの世界と地続きにつながっていたりするのかもしれない。それを確かめたことはないんだ。ナツキの言うことが嘘だという根拠を俺は持っていない。ただそれだけだよ」

呆然と、ウィルを見つめ返すことしかできなかった。言葉が出てこない。のろのろと正面を向くと、目が合ったエルヴァが穏やかに頷く。

隣りでウィルが茶化すように付け足した。

「龍は情け深い子ども好きで、加えてお節介だ。一度角を突っ込んだら絶対に引かないから、覚悟したほうがいい」

夏妃は一瞬ぼかんとして、その後思わず嘖き出した。

「角？ そっか、龍だからか。人間はそういうとき、首を突っ込むって言うの」

「へえ、似てるけど違うのか。面白いな」

空気が一気に緩む。足元に柔らかなものを感じて見下ろすと、さっきまで部屋の中をうろつくと歩き回っていた仔犬がすり寄っていた。膝に抱き上げると、手を逃れて夏妃とウィルの間のクッションに陣取り、さっさと寝転がる。

その頭を撫でながら、夏妃はエルヴァに申し出た。

「ひとつだけ、お願いがあります。私と一緒にこの仔のことも受け入れてもらえませんか」

「そのルヴトを？」

気持ちよさそうに目を細めてうとうとしている仔犬を見て、エルヴアが瞬きする。

「約束なんだそうですよ。もとの拾い主との」

ウィルが付け足す。エルヴアは納得したように何度も頷きながら、それでも思い悩むように仔犬を見つめた。

厚かましいお願いだっただろうかと不安になりかけていると、エルヴアがウィルに尋ねた。

「ウィル。お前はと思う？」

「俺個人としては、彼女の希望を叶えてやりたいですけどね」

反応を探るようなエルヴアの問いかけに、ウィルはなんでもないことのようにあっさりと答える。するとエルヴアも苦笑しながら了承した。

「わかった。それなら任せよう。ナツキ、君とともにそのルヴトも村に受け入れる」

「あ、はい。ありがとうございます」

彼らのやりとりにどんな意味があるのかはわからないが、とりあえずティリオとの約束は守れたようだ。ほっと息をつくど、ドアが開いてシルエラが明るく声をかけた。

「小難しい話は済んだかい？ さあ、ケーキが焼きあがったよ」

部屋に甘いにおいが立ち込めて、不思議とまた食欲が湧いてくる。

立ち上がって彼女が押すワゴンに近づき、配膳を手伝った。

「すごい、おいしそう!」

はしゃぐ夏妃とは対照的に、男性陣はテンションが低い。

「シルエラ、また黒キルシエのケーキかい？ 朝から重たいものは年寄りの胃にはつらいと何度も……」

「俺も甘いのはあんまり……」

シルエラは彼らをぎっと睨み、大げさにため息をつく。

「まったく、料理する甲斐のない男どもだね。ちよつとはナツキを見習ってほしいもんだ」

「一週間も同じデザートが続けばうんざりもするよ……」

「ウィル。そういえば一昨日コルナリナから手紙が届いてね。『愚息が無礼を働いていないか』と心配して」

「ごめんなさい。嬉しいな黒キルシエ大好きだ」

棒読みで言つて皿を受け取り、沈痛な面持ちでケーキを見つめる青年の姿は一種異様だった。エルヴァは余計な口を挟まずに、見た目は平然とお茶を口に運んでいる。どうやら小柄で快活な印象のシルエラが、この場では最強のようだ。

一方で、会話の中の新たな名前に首を傾げる。

「コルナリナさん、って誰ですか？」

「ウィルの母親だよ。コルナリナと私は幼馴染でね。武者修行の道中に持たま手紙をくれるんだ」

……武者修行？ なるほど、なんだか力強そうなお母様だ。

夏妃は自分の分の皿を手にもち、長椅子に戻ると、フォークで柔らかい生地を崩し口に運んだ。煮詰められたジャムのような果実の甘みと酸味が口の中に広がり、自然と頬が緩む。

その様子を眺めながら、シルエラは満足そうに頷いた。

「男どもがなんて言おうが、女の子が笑うんならお菓子は正義だよ」

彼女のその言葉に反論できる者はいなかった。

とにかく龍の村に受け入れられることになった夏妃だが、またひと悶着あった。

ケーキを一切れぺろりと平らげた夏妃に喜んだシルエラは、おかわりを皿にとりわけながら上機嫌だった。

「この村に住むならうちで暮らしなさいな。歓迎するよ」

「シルエラにまで懐かれたね、ナツキ。この家に住めばとりあえず黒キルシェのケーキには間違いなくありつけるよ」

ケーキを崩すだけで手を付けずにため息をつくウィルは、シルエラに笑顔で睨まれて苦笑した。

「でも、いいの？ 今でさえここは大所帯なのに」

「失礼だね。ナツキを養うくらい余裕はあるさ。それともウィル、あんたがナツキを引き取るとも言うのかい？」

不服そうなシルエラに、ウィルは平然と頷いた。

「うん、そのつもりだったんだけど。だめかな？」

夏妃は驚いて顔を上げ、ウィルを見た。シルエラも目を剥いて彼を凝視する。

「……本気かい？」

「ナツキを拾ってきたのは俺で、村長に保護を依頼したのも俺だ。その責任をとるのは当然だと思っけど」

「でも、ウィル。私はもう十分良くしてもらったよ。これ以上迷惑は……」

夏妃が口を挟むと、ウィルは首を振った。

「責任って言い方は押しつけがましかったな。俺は、ただの義務感から言ってるわけじゃないよ。ナツキと話して良い子だと思ったし、君と暮らすのも楽しそうだと思ったから、こうして申し出てる。幸い一人暮らしでスペースは余ってるしね。もちろん、決めるのは君だ」

判断を委ねられて戸惑う。

確かに、他の民家と変わらない大きさのこの家がすでに大所帯だというなら、夏妃がそこに加わるのは負担だろう。しかし、シルエラが心から夏妃を気に入ってくれていることも、その負担を厭わないだろうこともわかる。

ウィルの申し出も嬉しかった。好感を持っているのは夏妃も同じだ。ただ、一方的に面倒を見てもらってばかりなのは気にかかる。

夏妃は考え考え、彼に向かって口を開いた。

「私は、確かにこの世界では頼りない迷子だけど。それでも、何もしないで面倒だけ見てもらうっていうのは嫌なの」

それは、この世界に立っていることを覚束なくさせる気がする。ウィルは応えて笑う。

「うん。じゃあ、この村でナツキができることを探そう」

彼の言葉にほっとして頷く。シルエラが、残念そうに呟いた。

「やれやれ、振られちゃったね。せっかく可愛い孫が増えると思ったのに」

「シルエラ、それでは子どもが拗ねているのと一緒にだ。……だが、同感だな。私も可愛いひ孫が欲しかった」

おどけるようにそう言うシルエラとエルヴァを見比べて、ずっと気にかかっていたことを聞くことにした。

「あの。もしかしてお二人って……」

エルヴァが瞬いて、ああ、と笑み崩れる。

「言い忘れていたな。そう、シルエラは私の一人娘だよ」

察してはいても、はっきりとそう聞くとやはり驚く。よく見れば、確かに彼らの笑った目元や仕草などには似通ったところがあった。

「私はね、高嶺の花の次期村長に惚れぬいた、平凡な村娘だった母親に似たのさ」

シルエラが言い、エルヴァが懐かしむ目をした。愛しい相手を想う彼の表情はやはり魅力的で、見惚れるほど柔らかい。

「頑固で料理好きなところはシルエラと瓜二つだったな」  
「はいはい、母親と違って料理の幅が狭くてすみませんね」

軽口を交わす二人の間の空気は、慣れ親しんだ家族の間合いだった。  
見ているうちに自分の家族が思い浮かび、感傷的になる前に胸の



奥に押し込める。今は考えてもどうしようもないことだ。

「ウィルに栄養管理は期待できないからね。食事の時間は家において」

彼に張り合うみたいになんて誘ってくれるシルエラに救われる。

それにしても、エルヴァとその奥さんのエピソードは壮大なロマンスの気配がする話だ。いつか、詳しく訊こうと思う。

楽しい決心を胸に刻んだところで、表情を改めたエルヴァと目が合い、背筋を伸ばした。

「では、この村で暮らすうえで大切なことを話そう。

ナツキ、申し訳ないがここでは、龍として暮らしてほしい」

突然、心臓に重石を乗せられた気分だった。

「……嘘をつくんですか」

混乱のあまり、かえって声が平静になるのが不思議だった。ウィルが宥めるように言う。

「ナツキ。君は魔族でも妖族でも獣でもない。何しろ前例のない存在だ。それなら龍として扱うのが一番いい。ナツキの見かけは龍にしか見えないんだから」

「でも、私は龍じゃない」

頑なな夏妃に、エルヴァが真摯な目を向ける。……その目はずい。

「君を否定するような、ひどい提案なのはわかっているよ。だが、

ここは身寄りもなく、どの種族にも属さずに生きていけるほど穏やかな世界じゃないんだ。私たちは、龍のルールの中でしか君を守れない」

夏妃は反論できずに唇をかねでうつむく。エルヴァの気遣いがにじんだ声が胸に沁みた。

「何も、ずっと嘘をつき続けるわけじゃない。どちらにしろ、表向きは龍族だとして扱っても、我々には領内の異変は龍の王に報告しなければならぬ義務がある。その報告で嘘をつくことなどできないから、王にはナツキについて本当のことを言うしかないんだ。その後のことは、王のご判断と君の意志に依ることになる」

それでも、突然「実は人間なのだ」と言い出せば混乱を招くことは想像がつく。はたして王がそんなことを許すだろうか。

「龍の王さまは、私を危険なものだとみなすかもしれない」

龍は情に厚いと言うが、不審な者を安易に受け入れては為政者失格だ。

「もちろん、その可能性も含めて、王は公正な判断をなさるだろう。だが私は、ナツキなら大丈夫だという気がするよ。それに龍の王は、「黒色」を無下にはできない」

夏妃はつい、胡乱な目を彼に向けた。

「詳しく聞いていなかったですけど、「黒色」ってどうしてそんなに特別扱いされるんですか？」

公平じゃないと思う、と口をとがらせると、ウィルが吹き出した。

「特別扱いされて怒るなんて、ナツキは変わってるな」

「聞こえはいいけど、それって差別でしょう？」

冷たくウィルを睨むと、エルヴァが苦笑した。

「不快にさせていたならすまない。だが、龍の中で黒が特別なのは事実だ。あれを見てごらん」

そう言って示された小棚の上の壁には、横長の額が飾られていた。その中には色が違う4つの龍のモチーフがある。村長の家の玄関に掛かっていたものと同じ意匠<sup>デザイン</sup>だった。

「龍族には緑、赤、青、黄の4種族がある。それぞれ気性や暮らす地域に違いはあるが、基本的に情が深く身内を大事にする性質だ。そう、それに子ども好きだな」

「……それは何度も聞きました」

エルヴァは楽しげに笑って続ける。

「そして、どの種族にも属さないのが王族。龍の王は代々白龍で、王族以外に白色は生まれない。それと同じで、一族を持たないのが黒龍だ」

「珍しいんですか？」

「希少だよ。正確なところはわからないが、記録に残っているのは1頭だけだ」

たった1頭。

「それだけ……」

「彼は、ずっと昔、龍族を支配しようと侵略した魔族との戦争の英雄だった。劣勢に追いやられた龍の王の下に現れ、力を貸した。疲弊した龍族を鼓舞し、万の魔族を倒し、遂には魔族の王を退けたと言う。祝祭では定番の、子どもたちが演じる劇の有名な演目だ」

そういう風習はどんな世界にでもあるものらしい。だが、「英雄」という言葉はなんとも作り物くさい。

「それは、本当に実在した龍なんですか？」

「史実書に残っているし、赤龍の長老が幼い頃に会ったことがあると言っていた。あれももう2000歳近い化け物じみた方だからなあ」

呆れる風に言うが、それ以前にありえないだろう。龍の年齢は人間の5倍。ということは、人間換算でも400年近く生きているということになる。

さすがは龍。人間の常識では測りきれない。異世界の不思議を今さら再認識した。

「だから黒龍はほとんど神聖視される希少生物だ。「黒色」自体珍しいんだ、ナツキがニンゲンだと分かったところでそんなに差はない。どちらにしろ、龍族にとって保護する意義がある存在なんだよ、君は」

希少生物。保護。

レッドリストに載る野生動物になった気分だ。動物扱いが嬉しいわけではないけれど、ここまで話がぶっ飛んでいると怒りも湧いてこない。

ヒト科ニンゲン属準黒龍種、学名シーナ・ナツキ（）。希少保護生物に指定されてしまいました。

冗談のつもりでそんなことを思い浮かべてみたが、頬が引きつるばかりだ。

笑えない。なにが悲しくて、想像上の生き物のはずの龍に希少生物扱いされているのか。

「めちゃくちゃだよ……」

力なく呟く夏妃に、ウィルが笑う。

「だから言っただじゃないか。覚悟したほうがいいって」

いつの間にか部屋から姿を消していたシルエラが、妙齡の女性を連れて戻ってきた。淡い銀緑色の髪に少し色の濃い若葉色の瞳。誰かに似ている、と思っていると、当人が彼女のスカートの裾から顔を覗かせた。

「あ、ティリオくん」

「はじめまして、ナツキさん。息子がお世話になったようで」

彼の頭に手を置いて、彼女はオレアと名乗った。優しそうで、それでいて芯の強さが瞳に表れている女性だった。

夏妃は挨拶を返し、ティリオに報告する。

「約束は守ったよ。この仔、飼ってもいいって」

クッションの上で眠る仔犬を示して言うと、彼はぱつと笑みを広げて駆け寄ってきた。

今は寝てるから静かにね、と言うと、神妙に頷いて不器用な手つきで仔犬の背を撫でる。夏妃を見上げて、嬉しそうに言った。

「ありがとう、おねえちゃん」

笑みを返す夏妃の隣にやってきて、オレアが眉を下げた。

「ごめんなさいね、面倒をかけたみたいで」

「いいえ。私が自分で申し出たんですから」

オレアが微笑んで、きちんと折りたたまれた衣類を差し出した。

「私のもので悪いけれど、着替えを用意したわ。お湯も用意したから、良ければどうぞ」

「ありがとうございます」

正直、部屋着でいることになんまり抵抗を感じていたので本当に助かる。彼らの気遣いに感謝だ。お言葉に甘えることにして、風呂場まで案内してもらう。

説明によると、風呂は薪で火を焚き沸かすタイプらしい。しかし、ひとりになるともの珍しさへの好奇心よりも心細さが勝って、オレアが渡してくれた衣類をぎゅっと抱いた。元の世界との唯一のよすがである教科書も一緒に抱えている。

「これは現実で、夢じゃない。私は異世界で、できることを探して生きていく」

確認するように口に出して呟いてみる。納得のいかない思いは残るけれど、前よりはずっとまじな気分だった。

夏妃は意志に刻むように、小さな飾り窓から見える夏の空を仰いだ。

「さて、どうなるだろうね」

「さあ。しばらく様子を見ないことには何ともなりませんよ」

「とにかく、彼女から目を離すな。それがお互いのためだ」

「それはもちろん。上手くやりますよ。できれば、こんな真似はしたくないんですけれどね」

雲が一時、太陽の光を遮る。明度を落とした鈍い光を受けて、焦げ茶の瞳が硬質な色を帯びた。

「すべては、彼女次第です」

再び日射しが現れ、静かな応接室に二人分の影が戻っても、それ以上の会話はなかった。

今日も夏の日射しは絶好調だ。気温は上がり続け、昼を前に太陽も空の最高点に達しようとしている。

村の通りには、太陽から逃れて庇や木陰で涼む者たちの姿があった。ご近所同士談笑していたり、民家の軒先のベンチでは婦人たちが冷茶を振る舞っていたり。このまま昼食に移行しそうな雰囲気だった。

抱えた籠を揺すり上げて右手だけで持ち、目深に被った日除けのフードの縁を少し持ち上げる。雲が少ない空は完全な夏の色で、目に痛いほどの青さに目を細めた。

村のはずれに差し掛かると、目的の森が見えてきた。生い茂る木々の枝葉が傘になった森は目に涼しい。もう大丈夫だろうとフードを落としたところで、横手からにぎやかな声がかかった。

「あ、おねえちゃんだ！」

「黒龍さまだー！」

目を向けると、右手の畑のほうから子どもたちが手を振るのが見えた。手を振り返すと、彼らは不器用に低い木の柵を乗り越え、彼女のもとに走り寄ってきた。その中に見知った顔を見つけ、夏妃は子どもたちと目線を合わせた。

「こんにちは。畑のお手伝い？」

「そうよ！」

「今年は雨が少ないから、お水を上げないと野菜がしおれちゃうんだってー」



元気に答える女の子たちの後ろに控えめに立つ子どもが、足元の仔犬を抱え上げて夏妃を上目遣いに見た。

「おねえちゃんは、ウィルのところにいくの？」

「そう。ティリオのおばあちゃんのお使いだよ」

答えると、彼は目を輝かせて身を乗り出した。

「ぼくもいきたい！」

すぐに、彼より年嵩の女の子たちが目を吊り上げる。

「だめだよティリオ！ 森に入っちゃいけないって言われてるじゃない」

「森には子どもを食べる獣がすんでるんだよ。お母さんが言ったもん」

ティリオと幼馴染だという家がパン屋の姉妹は、いかにもお姉さんらしく彼をたしなめる。詰め寄られてたじたじとなったティリオは、眉を下げて反論した。

「でも、おねえちゃんはいれるんだよ。ぼくだって……」

「おねえちゃんはウィルや村長さまのお許しがあるからいいの」

「それにおねえちゃんは、黒龍さまだもの。特別なんだよ」

揃ってきらきらした目を向けてくる女の子たちの勢いに気圧された。あいまいに笑って、ごまかすしかない。

「特別かは、わかんないけど。でも、危険なのはほんとだから森には連れていけないよ」

「……つまんない」

無然とした表情になったティリオの言葉尻にかぶさるように、鐘の音が鳴りだした。粉ひきの風車塔から響く音は、空に畑に森に、高く渡っていく。

「お昼の鐘だ！」

「またね、おねえちゃん」

村のほうへ踵を返して走っていく女の子たちに、ティリオもののろと続く。夏妃は彼を呼びとめて、彼だけに聞こえるように約束した。

「夕方にまた村長さんの家に行くから、待ってて。その時に遊ぼう」  
「……うん！」

途端に機嫌を直したティリオは、元気に村へ走って行った。

言いそびれたが、炎天下を連れまわされた仔犬がぐったりしていた。まあ、家に帰るならシルエラあたりが気づいてくれるだろう、と希望的観測に任せた。頑張れ仔犬。

そういえば、ティリオが名前を付けると言っていたがどうなったのだろうか。夕方に会った時に訊こうと決める。

「さて、お使いを済ませますか」

ひとりごちて、夏妃は森の中に分け入った。

夏妃がこの緑龍の村に暮らし始めて3日が経つ。

本格的な夏に近づいていく空の様や山々の色は日本とそう変わらないが、湿気が少なく過ごしやすい気候なのはかなりありがたかった。冬は雪の日が多いというから、緯度が高い地域なのかもしれない。

他にも、この3日で学んだことは多い。

この地域には日本と同じように四季があること。キルシエはサクランボに似た果物であること。そして、本当に龍の中で「黒色」は特別視されているらしいこと。

誰もが知る「黒龍さま」と同じ色を持つ夏妃は、あつという間に村に受け入れられた。

親しげに接してくれる大人たちは優しいし、慕ってくる子どもたちは可愛い、実際のところ龍族ではない夏妃には居心地が悪い。他人の名前を借りて、成りすましているみたいな後ろめたさがある。

考えながら歩いていたら、木の根につまずいて転びかけた。慌てて籠を抱えなおし、真っ直ぐ前を向く。

他に気を取られていなければ、森の中はとても歩きやすかった。下生えも一定以下の長さになっているし、枝葉の間からは適度な陽光が届く。青々と活発な夏の森の様子はそのままなのに、荒れ放題にならないのが不思議だ。

赤い花をつける低木を右手に見て傾斜を慎重に降りると、開けた窪地に出た。窪地の真ん中には朽ちて横たわる太い倒木があり、その根元から細い若木が枝を伸ばしている。

少し大きく覗く空から射す木漏れ日が、スポットライトのように

当たる様は幻想的だった。ここに来るたび、夏妃はしんと胸の奥がはりつめるような、厳かな気持ちになる。

その倒木に腰かけた待ち合わせ相手が、夏妃に向かって軽く手を挙げた。不思議な色合いの髪が、粒子を纏うようにきらきらと輝いている。

「お疲れさま、ウィル。ごめんね、ちょっと遅れちゃった」

傾斜を下りきって彼に近づいていくと、彼はいつもの柔らかい笑みで応えた。

「大丈夫。待つのは結構好きなんだ。気にしないで」

その感覚は、わかるような気がする。しかし、待たせる側にはできればなりたくはない。

「でも、お腹空いたでしょう。これ、シルエラさんから」

「お、今日は厚切り肉とチーズのサンドイッチか。なんだか、ナツキが来てからやたらはりきってるなあ、シルエラは」

ウィルは、受け取った籠の日除けになっていた布を広げて自分のとなりに敷き、どうぞと夏妃に示した。夏妃は彼のナチュラルなフエミニストぶりにもいい加減慣れて、お礼を言っただけで座らせてもらった。

差し出された籠から夏妃もひとつもらう。彼はサンドイッチを頬張りながら、じつと夏妃を見て言った。

「朝からちよつと思ってたんだけどさ、なんだか顔色が悪い気がするよ。具合が悪かったりする？」

……ほら。やっぱり彼はフェミニストだ。気づいてほしくないことにも気づいてしまうほど。

苦笑しながら首を振る。

「暑いから、ちょっと寝苦しくて。そのせいかな」

「ああ。確かにこの頃、夜になっても気温が下がらないな」

頷くウイルの目が見れず、俯く。

本当は、そんなことが理由なのではなかった。確かに暑いことは暑いけれど、日本に比べたら格段に快適な部類に入る。

「具合が悪い時は、無理せず言つてよ。俺にじゃなくてもいいからさ」

「うん。ありがとう」

本当の理由は言えずに、彼に質問することで話を逸らした。

「ねえ、ウイルはいつも森で何をしているの？」

この森は広大で、遠くに見える山脈のふもとまでずっと続いているらしかった。中で迷子にでもなれば大変なことになるのは想像がつく。だからこそ、村では子どもたちが森に入することを禁じているのだろう。

彼はそんな森に、龍の姿に変化<sup>へんげ</sup>して早朝から夕方近くまで入ったきりだ。いったい何をしているのかずっと気になっていた。

「何つてこともないんだけどね。巡回<sup>巡回</sup>っていうのが一番近いかな」

ウィルはサンドイッチを呑みこんで、籠の中の水筒を取り出した。一緒に入っていたカップにお茶を注ぐと、夏妃に渡してくれる。自分の分を注ぎながら、のんびりと彼女に尋ねた。

「この森さ、あんまり荒れてないだろ？」

まさにさっき考えていたことだったので、大げさなほど大きく頷いてしまう。彼はお茶を一口飲んで、熱かったらしく小さく眉をかめた。

「どうもそういうのが緑龍の力の一部らしいんだよ。変化した状態で近くにいると、弱った植物が持ちかえす。余分な成長を抑えて一番いい状態に森をとどめる。寿命を延ばせるわけでも操れるわけでもないけど、ほんの少しだけお互いの力を借りて共存できる。その程度のことなだけだね」

なんでもないことのように言うが、夏妃は飲みかけたお茶のことも忘れて彼を凝視した。

「その程度なんてことない。私は十分すごいと思うけど」

「そうかな。労を惜しまなければ誰にでもできることだよ」

肩をすくめてお茶を吹き冷ます彼は、頓着しない。

「この森を全部、ウィルひとりで見回っているの？」

「昼間は俺ただけけど、夜間は村の若い奴らが組んで回ってるよ。厄介なのは夜だからね。獣が活発になるし、たまに凶暴なもの出る。そういうのを村に近づけないのも務めなんだ」

「大変なんだ……」

「この土地に生きてるのは龍族だけじゃない。このくらいは仕方な

いよ」

やがて食事を終えると、ウィルは手についたパンくずを払い、立ち上がって伸びをした。

「さて、食後の運動といこうか。今日のシルエラのお使い内容は？」  
「あ、うん」

飲み終えたカップを倒木に置いて、肩掛けかばんから小さな紙片を取り出した。開くと、薦模様のような複雑な走り書きが3つ並んでいる。夏妃は英単語の意味を思い出す時のようにその走り書きを睨んだ。

「ええと。ル、ブ、ス。これがブ……ヴィレンス。3つ目が、ブレ、ヤン？」  
「どれ」

差し出された手にメモを渡す。ウィルは惜しい、と片眉を下げて見せた。

「正解はル布斯、ヴィレンス、プレイヤーナ。ル布斯は野イチゴの一種で、ヴィレンスとプレイヤーナはスパイスとして使う香草だよ」  
「うー、そっか。伸ばす音は逆さ文字になるから……」

眉間にしわを寄せて記憶に刻もうとする夏妃に笑って、ウィルが頭を軽く撫でた。

「焦らなくて大丈夫だよ。まだ3日目なのに、ずいぶん読めるようになったじゃないか」

「単語だけね。昨日もティリオと一緒に、オレアさんに習ったのに

なあ」

「仲良しでいいことだね。さあ、お使いを早く済ませよう」

宿題代わりのメモをたたんで、ウィルがカップや水筒を手早く片付ける。夏妃も手伝い、少し軽くなった籠を抱えた。

「確かこっちに、ちょうどいい出来のルブスの茂みがあつたな」

勝手知つたる庭のように迷いなく歩くウィルに続いて、夏妃も歩き出した。



必要なものを採取し終えてウィルに森の出口まで送ってもらった頃には、いつの間にか空に雲が増え、山脈の尾根には入道雲が育っていた。天に届くほどの高さのそれは、まるで地上を睥睨する巨人のようだ。

とうに昼休憩の時間は終わったらしく、先ほどとは打って変わって、村の通りは静かだった。それぞれの畑や工房といった持ち場に戻ったのだろう。遠くから硬い物同士を打ち合わせる高い音や掛け声、手伝う子ども達の元気な声が聞こえてくる。

村長の家に着くと、玄関ではなく裏口にまわった。正面は来客用で、親しい者や家族はそちらを使うのだと言う。誰かしらがいるので、そちらの方が用を済ませやすいというのもある。

今日もすぐに、見知った姿を見つけることが出来た。

「こんにちは、オレアさん。シルエラさん、お使い行ってきましたよ」

声をかけながら籠を持ち上げて示す。

「あら、こんにちは」

「お疲れさん、ナツキ。戻ったばかりで悪いけど、こっちを手伝ってくれるかい？」

「はい。なんですか？ それ」

夏妃は籠を裏口の階段に置き、何やら長いものを手繰っている彼女たちに近づいた。糸のように細い紐に、等間隔にいびつな形の鈴

がついている。絡まったそれをほどこながら、シルエラが答えた。

「これは獣除けだよ。さつき森に入った若いのが、狼の足跡を見つけたって話でね。念のため警戒するようにって触れが出たのさ」

「狼？」

固有種が絶滅した日本では縁のない生き物だ。とつさに浮かぶのは赤ずきんちゃんの悪役狼くらいのものだが、さすがに危険な猛獣だというくらいの認識はある。

「それは、怖いですね」

たいした実感もないままとりあえずそう言うと、シルエラはからりと笑い飛ばした。

「まあ、今夜あたり巡回役を増やすだろうし、心配はいらないよ。ただ、ウィルも出張ることになるかもしれないからね。今日はうちに泊まりなさいな。さすがにナツキをひとりにしておくのは心配だよ」

「そうですね。よろしくお願いします」

頷いて、ふと今ひとりきりで森にいるはずのウィルを思い、不安になった。

「あの、ウィルは狼のことを知ってるんでしょうか。さつき別れるときは何も言ってなかったけど……」

「ああ。誰かしら知らせに行っただろうし、ウィルなら大丈夫だよ。あの子は若いの中では一番頭も回るし、引き際も心得てる。滅多な事にはならないだろう」

なんでもないような口調にはウィルへの信頼が表れていた。それはそういえば、エルヴァや村の子ども達が彼について話すときにも言葉の端々ににじんでいたように思う。

羨ましい、と思った。

夏妃に関しては、王城に村長たちが参内して龍の王に報告を行うという、秋の定例会まで保留となっている。この猶予期間の間に自分にできることを探そうと決めたのだが、読み書きもおぼつかず力仕事の役にも立てない身では、なかなか難航していた。

シルエラ達はこうしてこまごました頼みごとを回してくれて、感謝してくれる。それはありがたく嬉しいけれど、情けなさも感じていた。

気が滅入る前に落ち込む思いを振り切って、夏妃は絡まる紐をほどくのに集中した。

獣除けを庭に設置し終え、採ってきた野草を使った夕食の下ごしらえがひと段落したころ、ふとオレアが窓の外を見て呟いた。

「ティリオの帰りが遅いわね。いつも陽が落ちる前には帰ってくるのに」

言われてみれば、遅いかもしれない。夏妃は手の水を払いながらオレアを振り返った。

「そのまま遊んでるのかもかもしれませんよ。私、迎えに行ってきたでしょう」

「でも、入れ違いになるかもしれないし……」

「今日はこちらでお世話になるので、ついでにウィルの家に寄って必要なものを取ってきます。いつもティリオたちが遊んでる路地はその途中だし、平気ですよ」

借りていたエプロンを外しながら重ねて言うと、オレアはほっとしたように頷いた。

「そう？ 助かるわ、ありがとう」

「じゃあ、行ってきますね」

「気を付けて行くんだよ」

いつも持ち歩いている麻のかばんを斜め掛けして、シルエラの声を背に裏口を出る。この時間帯にしては外が薄暗い気がして空を仰ぐと、真っ黒な雲が空を覆っていた。風が強く、重たそうな雲がのろろと流れていく。典型的な夕立の前触れだ。急いだ方がよさそうだった。

空模様に急かされるように、足早に家路に着く村人たちの流れに混じって先を急ぐ。強風にあおられているのか、村中の獣除けの鈴の音が幾重にも重なって聞こえていた。村全体が、不吉な者の訪れに怯えているかのようだ。

ティリオやパン屋の姉妹の遊び場になっている路地に差しかかり、覗きこんでみた。一応呼びかけてみたが返事はなく、入れ違いになったのかとため息をついた、次の瞬間。

後ろからフードを引っ張られて息が詰まった。踏まれた猫みtainな声が喉から漏れ、たたらを踏む。振り向く前に、悲愴な声が夏妃を呼んだ。見れば、夏妃のフードをつかんでいるのは件のパン屋の姉妹だった。

「おねえちゃん、大変、大変だよ！」

「はやく、はやく来て！」

何やら興奮状態で力いっぱいフードを握りしめるので、意識が遠のきかける。

お、落ち着いてくれないとこっちが大変なことになる。とにかくがんで彼女たちの手を外させた。やっと呼吸を確保して、首をさすりながら視線を合わせた。

「どうしたの？ フィコちゃんに、ココちゃん」

「わたしたちはちゃんと止めたんだよ！」

姉のフィコが涙目で訴える。

「でも、ティリオが小さいルヴトを追いかけて行っちゃった！」

妹のココが必死に夏妃の腕を引っ張る。

嫌な予感がした。

「行っちゃったって、どこへ？」

二人は声をそろえ、ほとんど叫ぶように訴えた。

「森の中だよ！ ティリオが狼に食べられちゃっ！」

ざっと血の気が引く音を聞いた。勢いよく立ちあがり、鋭い声で訊く。

「どこ!？」

「昼間、おねえちゃんと会った畑に入ってすぐのところだよ」

すぐさま駆け出したいのを堪えて、姉妹の肩に手を置いた。

「わかった、私が行ってみる。二人は村長さんの家に行つて、誰かにこのことを伝えて。そしたら大人が動いてくれるから、大丈夫。そのあとは一緒に、真つすぐ家に帰りなさい。いい？」

真剣に頷くのを見届けて、今度こそ駆け出した。腰で跳ねるかばんが邪魔だが、今は構っている余裕もない。普段から運動などないので、あつという間に息が上がる。それでも、足は止められなかった。

畑に辿りつくと、膝下まであるスカートをたくし上げて柵を飛び越えた。なるべく苗を踏まないように平行に並ぶ畝を突っ切り、森に近づく。黒々と聳える森は、風でざわざわと不穏な音を立てている。

すばやく目を走らせると、常に設置されたままの獣除けの紐が不自然にたわみ、茂みにひっかかっていた。ちょうど子どもがくぐれそうな隙間だ。ここから入ったと見て間違いなさそうだった。

森に向かってテイリオの名前を何度か呼びかけたが、返事はない。夏妃は、腹を括った。

大人たちがすぐに駆けつけてくれることを祈り、二重になった獣除けの上の紐をつかんでくぐる。触れた鈴がちりちりと、警告するように音を立てた。

森に入ったことがあると言っても、決まった道を往復するだけだし、たいていウィルが外まで送ってくれていた。だから、夏妃にとってもこの森は見知らぬ場所に等しい。ごうごうと枝を揺らし、薄暗く視界の悪い森は、ひどくよそよそしく恐ろしげだった。

あの気弱なティリオがこの中にいるのかと思うと、怖気ている暇さえ惜しい。目につく枝を折って目印にしながら、奥へ進んだ。

真つすぐ行くと急斜面に出くわした。子どもはおるか夏妃にも登るのは不可能だと思える絶壁で、こちらの可能性は捨てた。分かれ道まで戻り、次は右手に進む。今度は、行く手にトンネルの出口に似た明るい半円が見えた。どうやら開けた場所につながっているらしい。

屋根のような枝葉の下から出ると、そこは谷川に面した狭い空間だった。ほとんど「崖っぷち」と呼んでもいい。似たような幅の間が、頼りない道のように左右に伸びていた。

覗きこむと水面まではせいぜい10メートルくらいの高さだったが、流れの中にところどころ岩が見える。落ちれば無傷では済まないだろうと思った。

まさか足を滑らせて……と嫌な想像に心臓が凍りつきそうになったが、それは杞憂に終わった。谷川を辿って下流に目を向けたところで、そんなに離れていない崖の縁に、見慣れた淡色の髪と空色の上着を着た小さな姿を見つけたのだ。

無事だったことに安堵しへたり込みそうだった。しかし、谷川を背にした彼の姿はいかにも危なっかしい。夏妃は駆け寄り声をかけようとして、ぎくりと動きを止めた。

体重の変化を受けて、靴の下の砂利が音を立てる。気づいたティリオが一瞬こちらに顔を向け、泣きそうな顔になった。

夏妃は、動けない。ティリオの正面の森の中に、金色の対の眼が光るのが見えた。それもひとつやふたつではない。ざわりと背が泡立つ感覚が、無数の生き物の息遣いを伝えた。

狼。

非現実だった生き物が、重い存在感を持って目の前に現れていた。



こんなのって反則じゃない？ 赤ずきんちゃんだって三匹のこぶただって相手の狼は一頭だけだった。

麻痺しかけた頭でそんなことに憤る。

ある日森の中で出会った狼さんにはどうすべきか、夏妃に知識はない。

初めて龍に出くわしたときも危険を感じはしたけれど、なにせ相手は「龍」なのだ。現実感なんてなかった。

それと狼とはまた違う。おとぎ話の中とはいえその狂暴性を知っているし、日本では絶滅していても他の地域には実在する獣だ。危機感をあおるには十分だった。

とにかく、狼の群れがこのままティリオと見つめあったままで満足してくれるかどうかの保証はない。大きな音を立てないようゆっくりとティリオに歩み寄りながら、ぎりぎり届く程度の声をかける。

「ティリオ。狼の眼を見たまま、背中を見せないようにこつちに歩いてみて。できる？」

熊と出くわしたときの対処法にそういうものがあつたはずだ。背を向けると獣は追ってくる習性があるとか何とか。

ティリオは身じろぎしたが、狼に視線を固定したまま動かない。やはり、難しいか。夏妃だって、足がすくんで今にも止まりそうだ。

ティリオに近づくとつれ、森の中の狼の姿がはっきり見えるようになった。

金の鋭い眼。硬そうな濃い灰色の毛並み。大きさはゴールドンレ

トリバーの成犬ほどもある。人懐こい飼い犬とは違うこの群れに襲われたらと思うと……、想像するのを理性が拒否した。

やっと手が届くというくらいの距離になって、ティリオが金縛りから解けたような勢いで夏妃に飛びついた。抱きとめて、彼が腕に抱えた仔犬を見てやっと気づく。ここまで狼の群れがやってきた理由。ティリオと一緒にいた仔犬が森に飛び込んだ理由。

ティリオを背にかばって、狼の群れと正面から対峙した。

「この仔は、あなたたちの子どもだったのね？」

返事はないと知りながら、訊ねていた。胸の内は苦い思いでいっぱいだった。

エルヴァやウィルは気づいていた。だから、仔犬を受け入れることを一度ためらったのだ。でも、夏妃は知らなかった。仔犬だと信じて疑わなかった。

教えてくれていれば、と思うのは八つ当たりだ。それより今は、目の前のことをどうにかしなければならぬ。状況はたぶん、最悪だった。

子どもを返せば大人しく帰ってくれるだろうか。望みは薄いが、今できるのはそれしかないような気がする。

「ティリオ、その仔を離してあげなさい。その仔の本当の家族はこの狼たちなの」

「でも、もうオーロはぼくのかぞくでもあるんだよ」

ティリオは戸惑っていた。夏妃は振り向きなくなるのを抑えて、前を見たまま訊ねた。

「オーロって名前を付けたの？」

「そう。オーロリストエルマーナだよ」

ペットの名前にしてはやけに大仰な響きに、こんな状況だと言うのについて力が抜けた。龍の名前からすれば常識の範囲内なんだろうが。……よくわからないけど。

狼に動きがないか眼を走らせながら、ティリオの説得を続けた。

「でもね、どちらの家族を選ぶかはその仔が選ぶことなの。自分に置きかえてごらん。ティリオが迷子になって、見つけてくれた誰かに親切にしてもらって、家族になろうって言われたら。そしたらティリオは、すぐにそこの家の子になれる？　自分で選びたいでしょう？」

ティリオが押し黙る。迷う気配はあったが、彼が仔狼を地面に下ろすまで、それほど時間はかからなかった。

鼻をすすりながら、それでも小さな仔狼を思いやった彼を優しい子だと思う。この後どうなっても、彼だけは逃がそうと決意する。その夏妃の足元を、転げるように仔狼が駆けて行った。

群れの先頭にいた狼が鼻面を下げ、子どもの鼻先と触れ合わせる。その姿は確かに、親子の触れ合いに見えた。

やがて顔を上げたその狼が、二人の方へ踏み出した。他の狼もじりじりと、間合いを詰める。やはり、許してはもらえなかった。絶望的な気分になりながら、ティリオを逃がす術を懸命に考えた。ティリオは幼い。自分が時間を稼ぐしかない。

一歩踏み出そうとした夏妃の目の前を、背の高い背中が遮った。

緊張で、視界が狭まっていたのだろうか。それまで全く気付かなかった。驚く夏妃の視線を背に受けて、彼は飄々と言った。

「自分が囷になろうって？　なかなか自暴自棄だね」

心を読んだようにそう言って、彼はちらりと視線をよこす。表情は笑っているが、眼は真剣だった。首を縮めながら、それでも安堵した。

「ウィル、ごめん……」

「まあ、間に合ってよかった。すぐに村の大人たちも追い付く。もう少し辛抱して」

そう言い置いて、彼は狼の群れに向かって一歩踏み出した。動きを止めた狼たちに向かって口を開く。

「申し訳ない。貴方たちの子どもとは知らずに保護していたようだ。しかし、害意があつてのことではない。それは信じてもらえないだろうか」

ウィルの口調には狼への敬意がにじんでいた。おそろおそろ見れば、確かに彼らの眼には深い知性の色がある。やみくもに襲ってくるような生き物ではなかったのかもしれない。

しかし、続いた声にはさすがに度肝を抜かれた。

『そこをどいてくれないか、龍の若者。我々はもとより怒りを持っていない。その娘に話があるのだ』

「じゃ、しゃべった!？」

つい大声を上げてしまい、自ら口をふさいだがもう遅い。ウィルが呆れた目を向けた。

「前にも言ったけど、喋らずにどうやって意志疎通するのさ。ナツキの世界って随分不便なんだな」

夏妃からすればこっちの世界の方が奇天烈なのだが。

「じゃあ、この世界では犬も猫も馬も喋るの？」

「獣は獣だ、喋らないよ。ただ、彼らが特殊なのさ。俺たちは普通の狼と分けて、彼らを『魔狼<sup>ルウト</sup>』と呼ぶ。太古からの知識を持つ森の賢者だ」

『やはり、その娘は龍ではないのだな』

群れのリーダーなのだろう、先頭の一頭が静かな眼を夏妃に向ける。

ウィルは再び狼たちに視線を戻した。

「そうだよ。でも、彼女は龍族の保護下にある」

警戒する口ぶりのウィルに、狼は揶揄するように言った。

『だが、選ぶのは本人だ。さっき娘自身がそう言っていた。お前も聞いていただろう、龍の若者』

え、とウィルの横顔を仰ぐ。ウィルは答えず、夏妃に訊いた。

「だそうだけど、どうする？」

「……話を、聞かせてください」

ウィルの陰から出て、魔狼の前に立つ。もう彼らを怖いとは思わなかった。

リーダーの魔狼はその場に腰を下ろし、夏妃を見つめた。その足元にじゃれかかる仔狼と相まって、なんだか和やかな空気になりつつあった。

『まずは礼を言おう。我が娘を保護してくれて助かった』

「いいえ、世話していたのはほとんどティリオなので、私は何も」

ウィルの後ろから伺うティリオを示す。魔狼の眼が優しくなった気がした。

『娘に名をくれた子どもか。龍の言葉で『金色を持つ賢き兄弟』。良い名だ』

ティリオははにかむように小さく笑った。

「……うん。いっしょうけんめいかんがえたんだ」

その彼の言葉に反応するように、仔狼が親狼から離れ、ティリオの足元にやってきてじゃれつき始めた。戸惑う彼に、魔狼が言う。

『娘も自分で家族を選んだ。お転婆だが我々の血を引く賢い娘だ。よろしく頼む』

「う、うん……」

急いで頷き、仔狼を抱き上げる。

「よろしくね、オーロ」

呼びかけると、きゃんと応えて嬉しそうに尻尾を振る。良いコンビになりそうだった。

続いて、思わず頬が緩んでいた夏妃に魔狼の眼が向けられた。

『先ほどの会話でおおよそは理解したが、お前は世界の者ではないのだな?』

ついウィルを窺いそうになり、こらえた。自分で言ったことだ。自分のことは、自分で選ばなければならない。

「……はい。元の世界で眠って、眼が覚めたらこちらの世界の森の中でした。ウィルに拾われて、緑龍の村にお世話になるようになったのが3日前です」

ふむ、と魔狼が唸る。

『なるほど。それでわかった。お前からはこの世界の匂いがしないからな』

わかる者にはわかることだったようだ。身を乗り出し、懸命に訴えた。

「私、どうしてこんなことになったのかわからないんです。とにかく知っているんですか? それなら、教えてください」

森の賢者と謳われる彼らならわかることもあるのかもしれない。そう希望をかけたが、返った言葉は否定だった。

『いいや。世界を越えた者の話など聞いたことがない。すまないが、お前の役に立てる情報を我々は持っていない』

「……そう、ですか」

彼らのせいではないとわかっていても、肩が落ちた。

『だが、気になることはある』

「気になること?。」

顔を上げると、再び希望を抱く前に遮られた。

『今の段階ではそれは明かせない。我々の一族にも破れないルールがある。……すまない』

気遣う響きに、慌てて首を振った。

「いいえ、いいんです。気にしないでください」

『だが、もし明かせるときがきたらお前に話す。約束しよう。ふたりには恩がある』

「ありがとうございます」

頭を下げる。群れは森の中に去ろうとしていた。残っていたリ―ダーはもう一度振り返り、夏妃を見た。

『名前を聞いていなかった。娘、お前の名は?』

「夏妃です」

『ナツキ。知らない響きだな』

「夏妃の夏は今の季節を、妃は位の高い女性を表します。……柄じやないんですけどね」

『覚えておこつ』

穏やかなその言葉を最後に、彼らは森に消えた。



その場に残ったのは、夏妃たち3人と重い疲労感。……いや、もうひとつある。夏妃はウィルを振り返った。

「ありがとう。駆けつけてくれて助かった。私ひとりじゃティリオを無事に帰せなかったかもしれない」

「どういたしまして。でも、ナツキには自分の身も大事にしてほしいな。ティリオだけが無事に帰っても意味はないよ」

「そうだね。でも、ウィル。本当は全部知ってたんでしょ？」

突き付けるようにそう言った。揺らがない彼の笑顔を睨みつける。

「知ってたって、俺が？ 何を？」

「こうなることを」

悪びれない彼に苛立つ。不信が胸を焼き、語調が激しくなった。

「あの仔が魔狼の子どもだってことを私に黙っていたのはどうして？ とつくに私たちを見つけていたのに姿を見せず、隠れて話を聞いていたのはどうして？ あなたの行動は全部おかしい」

ウィルはそれでも、いつもの能天気そうな笑顔のまま。ティリオがおろおろと二人の顔を見比べている。

「何も言わないの？」

「だって、君はもう答えを知っているんだろう？」

そう言われて、自分の顔が歪むのがわかった。泣くためでもなく、怒るためでもなく。ただ、感情を吐き出すために。

「私たちを、魔狼と会わせるため。いいえ、その時の私の反応から本音を探ることが、本当の目的だったんでしょ」

ウィルの眼に、初めて見る硬質な光が宿る。彼は唇を引き、眼は笑わないまま穏やかに告げた。

「ご明察。よくできました」

小学生を褒める教師のような口調。それとは裏腹な彼の表情に、背筋が冷えた。

夏妃の頬を雨が打つ。遠雷が聞こえる。  
嵐が来ていた。

「機嫌が悪そうだね」

ウィルの声で我に返る。彼は困ったように微笑んでいた。

「確かに、君を試すような真似をしたのは失礼だったよ。でも、君はあの危機的状況で幼いティリオをかばった。悪意や演技でできることじゃない。これで君の潔白は証明できたんだよ」

「……そういうことじゃない」

自分の声をどこか他人事のように聞いた。ウィルは聞き分けのない子どもを見るように、眉を下げて見せた。

「じゃあ、どうして怒ってるの？ 君が言ったんだよ。不審な者を安易に受け入れるのは不用心だって。それはその通りだ。だから僕らは、この3日間君を観察してきた」

そうだ。その通りだ。自分がそう言った。

それなのに、足元が崩れるような失望を感じているのはなぜなんだろう。

混乱する。

疑われないと言ってくれたウィルやエルヴァ。豪快な優しさで母親のように接してくれたシルエラ。きれいな黒色だと褒めてくれたオレアや村の大人たち。

それが全部嘘だとしたら。

大粒の雨の向こうのウィルの顔を仰ぐ。

さつき彼が狼からかばってくれたとき、心からほっとした。ウィルがいれば大丈夫だと思った。

いつの間にか、夏妃は彼を信頼していたのだ。だから、こんなにも悲しい。

「ウィルと一緒に暮らそうって言ってくれたのも、私を見張りやすくするため？」

「うん。それもあつた。でも、夏妃ならいいかなって思ったのも本当だよ」

その言い方は卑怯だ。苛立つ半面、まるで破局を迎えた恋人同士のような会話に、乾いた笑いも湧いてくる。

確かに彼との関係は、いま破局したのだ。

空を仰ぐ。曇天から放射線状に降る雨が夏妃の体を叩いた。雷の不穏な音が近付いている。それとは反対に、現実感はずいぶん遠のくようだった。

ウィルたちを責めるつもりはない。彼らはやるべきことをやっただけだ。そして自分は、彼らの上辺の優しさに依存していた。やるべきことをしなかったのは、愚かだったのは自分の方だ。

視線をウィルに戻す。焦げ茶色の瞳は硬い色を帯びたまま。

震える声がした。

「だめだよ」

夏妃とウィルの間に、テイリオが割り込んできた。夏妃をかばうように立ち、彼は精一杯の強い声でウィルに言った。

「おねえちゃんをいじめちゃ、だめ」

彼の純粹な優しさが胸に痛い。夏妃の心は決まっていた。

彼らがただの善人じゃないのなら。

私も行動を起こそう。

ティリオ、と小さく彼を呼ぶ。泣きそうな顔で振り向いた彼の首元に、かばんにかけていた手を滑らせる。ごめんね。少しだけ我慢して。そう囁いた。

ウィルの表情が強張る。ティリオがきょとんとしたまま夏妃を仰ぐ。その首に光る鈍色が、瞬く雷を反射した。

「いたぞ！」

遅れて響く雷鳴とともに、森の中から村の男たちが茂みを鳴らしながら現れた。彼らは安堵を顔に出して3人に駆け寄りかけ、その場の異様な雰囲気次第に次々足を止める。

彼らは愕然とした顔で3人を、ティリオの首元にナイフを突き付ける夏妃を凝視した。

ウィルの背後の彼らを視界に納めながら、夏妃は小さく笑う。

「責めるつもりはないよ。私も、全くの潔白だったわけじゃないものの」

初めてティリオと出会ったとき。仔犬のことを介して仲良くなったとき。どこかで、こうなることを知っていた。それに備えようとしていた。

それは確かに保身のためだったけど、誰かを傷つけても構わないと思っていたのも本当だ。それを否定することはできない。

だから。後戻りできなくなると知りながら、夏妃はティリオをぐつと引きよせて、男たちを睨みつけた。

「訊きたいことがあるの。私は、どうしてこの世界に呼ばれたの？眼が覚めたら龍の村の近くにいて、こんなに親切に受け入れてくれるなんて出来すぎてると思ってた。本当に、あなたたちは何も知らないの？」

戸惑う声を上げて近寄りかけた男たちに見せつけるように、ナイフの刃をティリオの頬にあてた。

「近づかないで。質問に答えて」

ウィルが男たちに動かないよう重ねて伝え、夏妃を見た。

「答える前にひとつ言っておくけど、君が異世界からやってきた龍とは違う存在だということは、俺と村長、それにシルエラとその旦那しか知らない。それに、君の監視に関わったのは俺と村長だけだ。シルエラたちでさえ承知していないことだった。それは誓って本当だよ」

言葉を区切ると、彼は軽く息を吐いた。

「君に信じてもらえなくても仕方ないと思うけど、君が何故この世界にやってきたのか、その理由は俺たちにはわからない。少なくとも、この村で知る者はいないだろう。ナツキを監視すると同時に君に近づく者も観察していたけれど、不審な行動をする者は一人もいなかった」

「じゃあ、私をあっさり受け入れたのは根っからのお人好しな親切

心からってわけ？」

皮肉っぽい言い方にも、ウィルは表情を動かさなかった。

「そうだ、と言いたいところだけど。もう知つての通り、俺と村長は君を監視していたんだから、純粋な親切心とは言えないな。でも、それはナツキを試すただけじゃない。君を守るためでもあった」

夏妃は眉をひそめた。

「守る？ 私をここに呼び寄せた不審者からってこと？」

「俺と村長が心配したのはそんなことじゃない。守りたかったのは、君自身からだよ」

意味が呑み込めず、ぽかんと彼を見つめた。

「……私？」

ウィルは、何故か悲しそうに微笑んだ。

「そう。知らない世界から来て、ひとりきりで放り出されながら、君はあまりに大人しすぎた。ただの迷子の子どもだって不安で泣きわめく。それなのに君は、ふさぎ込むでもなく、泣くでもなく、あつという間にこの村に打ち解けてごく普通に暮らし始めた。それが俺たちには、とても不安定に見えたんだ」

思いがけない言葉に戸惑う。

「それで私を怪しんだの？」

「それは違う。最初から、君が村に害をなす可能性は限りなく低い

と思つてた。だから、ほとんど君を試すことのほうがついでだったよ。それよりも、冷静な君の様子が心配だった」

「……それって、いけないこと？」

「君が外見よりも年上で、しっかりしている子だとわかったから、そういうものかもしれないとは思つたけど。でも、何かため込んでいるのは知つてたよ。それがいつ爆発してもおかしくはないってことも」

では、最初から見抜かれていたのか。この手の中のナイフも、どろどろした猜疑心さいぎしんも。

そう思うと、力が抜けた。情けなくて、視界が歪んだ。

ウィルたちは何も悪くない。村を守るために必要なことをして、その上で夏妃のことまで案じていてくれた。それを疑い、身勝手に刃を向けた自分のみじめさを思うと、雨に溶けて消えてしまいたくなる。

いつの間にか下がっていた手に、小さな手が触れた。

「おねえちゃん、だいじょうぶ？ ウィルがいじめた？」

わけも分からず、それでも夏妃を心配するティリオの顔を見て、最後のちっぽけな意地まで碎けた。ナイフを落として、その場に入り込んだ。視線を合わせて力なく首を振る。

「ちがうの。私が間違えたの。……ティリオ、ごめんなさい」

どんな理由があろうと、彼にしたことは絶対に許されない。今更ながら、自分の行為に寒気がした。いつの間にか歩み寄ってきていたウィルが、ティリオの頭に手を置いた。



「とにかく、話はあとだ。いつまでも雨に打たれてたら風邪をひく。帰ろう」

彼の眼からは、もう硬質な冷たい色は消えていた。いつも通りの焦げ茶の瞳をじっと見る。

「またお人好し？ 私はティリオを傷つけようとしたのに」

半ば咎める口調でそう言うと、ウィルは苦笑した。

「傷つけるって、そのナイフで？ それはずいぶん難しいと思うけどな」

彼が視線で示したナイフは、刃の部分が銀色の箔でぐるぐる巻きにされていた。日焼けに弱い作物を保護するのに使うシートを細長く切ったもので、アルミホイルよりは色も鈍く薄っぺらい代物だった。

雨の中で遠目にはわからないだろうと思ったが、ばれていたのだろうか。だとしても、そんなことは言い訳にもならない。

「それでも、中身は本物のナイフだよ。ティリオにそれを向けたことは変わらないじゃない」

「真面目だなあ、ナツキは。そんなだから俺たちがこんなに心配する羽目になる」

「なにそれ」

むっとしながら立ち上がる。ウィルは笑った。

「許すかどうかはティリオやシルエラたちに聞いてごらんよ。俺は

お互い様だから、ナツキを責められない」

彼に促されて、ティリオが戸惑ったように夏妃を見上げた。

「おねえちゃん、かえろうよ」

「……ティリオ、私はあなたにひどいことをしたんだよ。だから、私を許しちゃいけないの」

ティリオはぶんぶんと首を振る。泣きそうな顔をしていた。

「ひどいことなんかないよ」

「ティリオにはまだわからないだけ。わかつたらきつと、私を軽蔑する」

「わかんないよ、なんで？ おねえちゃんはむかえにきてくれたよ。それに、あそぼうつてやくそくしたのに！」

ぎゅつと力を入れて抱きしめられたオーロが、嫌がつて暴れた。

仔狼が腕から逃れて飛び降りた先が、運悪く崖側だったのがいけなかった。

慌ててオーロを捕まえたティリオの足が、崖の縁で滑る。考えるより先に体が動いた。

宙へ傾いたティリオの体を引き戻すと、その反動で自分の体がバランスを失った。地面にティリオが転ぶのを見届けると同時に、襲う浮遊感。悲鳴も出なかった。

音も、色も、感覚も遠ざかる。

意識が真っ黒に染まる前に、誰かの体温に包み込まれた気がした

けれど。何もわからないまま、ふつりと全部が途絶えた。

暗闇を本気で怖いと思ったことは今までなかった。

幼い頃はそこに得体のしれない何かが潜んでいると信じてやみくもに恐れていたけれど、次第に闇は闇だと学んだ。

だから、怖くはない。暗いのなら明かりを灯せばいいし、出口を探して外に出ればいい。逃れる術があるものを怖いとは思わない。

では、出口のない暗闇があるとしたら。それは、耐えられる恐怖だろうか。

目を開けると、ごつごつした岩肌が見えた。わけがわからず体を起こそうとすると、視界にウィルの顔が割り込んできた。

「よかった、大丈夫？」

彼の銀緑色の髪から、夏妃の頬へ滴が落ちる。しかも、息がかかるほど顔が近い。のけぞって、起こしかけた頭を地面にぶつけた。火花が見えた。

「……大丈夫？」

「……じゃない」

涙目で後ろ頭を押さえながら、彼をどかして体を起こした。見ればお互い全身ずぶ濡れた。

岩のくぼみのような場所にいらしく、雨は当たらない。外はまだ本降りの雨が続き、少し遠ざかった雷鳴が聞こえた。

「どこか痛むところはない？」

腕や足を確かめて、頭をさすりながら頷く。

「うん。ぶつけた頭以外はなんとも」

「そっか。目が覚めてよかった。川に落ちる前に気を失ってたから、水は飲んでないと思うけど、心配したよ」

言われてみれば、口の中がなんだか気持ち悪いし胸がむかむかするが、支障はない程度だ。

ということは、こういう時にお約束のやむを得ず人工呼吸、みたいな展開はなかったわけか。整ったウィルの顔を見ていると、残念なような、ほっとしたような。

ずれたことを考えかけ、我に返る。やっと、今の状況を思い出した。

「あ、あれ？ 確か崖から落つこちて……」

「そう。あの雨で増水して、岩が隠れていたから助かったよ。いつもの水位だったら、大怪我くらいじゃ済まなかった」

崖の上から眺めた谷川と、落ちる時の浮遊感を思い出して身震いする。シャツの裾を絞るウィルを見た。

「かばってくれたの？」

「俺はこの川で泳いだこともあるし、地理もわかる。こうしてちょっといい岩のくぼみも見つけられたしね」

「だからって……」

言いかけて、彼の左腕が目に入る。手首の少し下から肘のあたりまで、刃物で切ったような傷口があった。

「怪我してるじゃない！」

「ああ、これ？」

彼はなんでもないことのように自分の傷を眺めた。

「見た目は派手だけど、浅いから大丈夫」

「でも、血が」

「そのうち止まるって」

のらりくらりとした彼の態度に、何かがぶちつと切れた。ウィルの左手首をつかんで、ぎっと睨む。どすの利いた声が出た。

「いいから腕を出しなさい」

「……はい」

怯んだウィルが急に大人しくなった。どんな顔になっていたのか自分ではわからないが、とにかく傷の処置にかかる。

夏妃はびしょ濡れのかばんからハンカチを取り出し、傷の上に当てて押さえた。保健の授業で教師が言っていたことを必死に思い起こす。

出血したときの応急処置で大切なのは、とにかく出血部位を押さえること。これにまさる止血方法はないと教師は言っていた。映画などでよく見る根元を縛る行為は、素人が行くと指の壊死などのリスクも伴うのだという。

抑えるうちにハンカチに血がにじんでくる。確かに命に係わる大怪我ではないかもしれないが、これは夏妃のせいで彼が負った傷だ。申し訳なさで声がかすれた。

「ごめんなさい……」

疑って、身勝手に脅して、怪我までさせて。彼には迷惑をかけてばかりだ。

ウィルは夏妃を見下ろして、厳しい声音で言った。

「どうして謝るの。ナツキは、ティリオをかばったことを後悔してる？」

「そんなわけない！」

とっさに顔を上げると、ウィルは表情を和らげて頷いた。

「わかってるよ。それは、俺も同じだ。だから、俺はナツキをかばったことは謝らない」

そして彼は、夏妃から視線を外して息をついた。

「……でも、こんなことになったのは俺のせいだな。ごめん」

夏妃は驚き、傷口を押さえる手を外しそうになって慌てて当てなおした。

「な、なんで？ ウィルのせいじゃないよ」

「理由はどうあれナツキを傷つけたし、追い詰めたのは俺だ。それに、わざとナツキを怒らせる言い方もした。もどかしかったから」

「もどかしい？」

ウィルと間近で目が合つて、思いのほかお互いに密着していたことに気付く。離れるわけにもいかず、呆けるように彼の眼を見つめた。

ウィルの眼はどこか悲しそうに見えた。

「ナツキは、ずっと何かに悩んでるだろ？ でも、誰にも言わない。ひとりで抱えて、夜中に泣きながらうなされてる。……勝手だけどさ、俺はすごく悔しくて、悲しかったよ」

……気付かれていた。隠し通せているつもりだった自分が愚かだったんだろ。彼の目を見れず、視線が落ちた。

「君の問題だから、口を挟まずにしようと思った。でも、嫌だよ。

ナツキが苦しんでるのに、何もできないのは嫌だ」

「そんな……」

感情が詰まったみたいに、喉が痛くて声がうまく出ない。それでも絞り出す。

「そんなこと言われたって、どうしたらいいの。今以上にウィルに頼ったら、あんまり情けないよ。何にもできなくて迷惑ばかりかけてるのに」

「迷惑なんかじゃない」

「そう言うのは知ってたよ。ウィルもみんなも、優しいから。だけど、怖いんだもの。自分の足で立っていなかったら、消えちゃいそうで」

涙が握りしめた手に落ちる。もう止められなかった。



「ここに来てから、眠るたびに真っ黒な夢を見るの。何もない、ただ真っ黒な夢。私、暗いところを怖いと思ったことなんてなかった。だって出口がどこかにあるはずだもの。明かりがついてる場所があるはずだもの。でも」

悲鳴みたいな声が喉から漏れた。涙をぬぐうことも思いつかず、ただ体を縮めて震えた。

「でも、どこにも出口がないの。どこを見ても真っ黒。自分の体さえ見えない。ウィルたちは私の黒い色をきれいだってほめてくれたけど、そんなの嘘だよ。私は怖い。いつかあの真っ黒な夢の中に、私も溶けて消えちやいそうな気がする」

怖かった。いつも目が覚めるたび、自分の手を見て安堵した。心の底から帰りたいと願って、眠りについても目覚めれば変わらず異世界で。夢さえ元の世界を見せてはくれない。もうずっと、怖くて仕方なかった。

「どうして私なの。どうして私は、こんなところでひとりぼっちなの」

思いを吐き出すと同時に、震える体を抱き寄せられた。抱え込まれた体温は、崖から落ちるときかばってくれたのと同じもの。

ウィルの声も震えていた。

「ごめん。泣かないで」

彼のほうが途方に暮れた子どものような声をしていた。驚きで気がそがれ、気持ち吐き出していくらかすつきりしていたこともあ

って、つい笑ってしまった。

「……なんなの、もう。抱え込むなって言ったり、泣くなって言ったり」

「うん。ごめん」

腕を緩めて体を離れた彼は、急に慌てだした。

「あ、忘れてた。ナツキの服に血がついたかも」

「そんなのどうでもいいよ。血も止まってるし大丈夫だった」

呆れて頬の涙を拭い、彼の腕に触れて確かめる。

その手を取って、ウィルがまっすぐに見つめてきた。

「ナツキ。俺は君をひとりにしない」

……なんか、プロポーズっぽいんですけど？

自分で言ったことだし、彼が真剣なのもわかるが、やっぱりウィルはどこかずれている。照れるより先に笑みがこぼれた。

「うん。ごめんね、後ろ向きになってた。ウィルが見つ付けてくれたから、私はひとりじゃなかった。感謝してる」

ウィルも表情を緩めた。その眼が少し赤い。何故かそのことに気付いたとき、抱きしめられたことやプロポーズまがいの台詞よりもずっと恥ずかしくなった。

「な、なんで泣くの？ ウィルが泣くことなんてないのに」

「ナツキが泣いてるのを見て、平気でいられるわけないよ」

「え、私のせい？」

動揺で眼が見れない。それなのに彼は手を離してくれず、追い打ちをかけられた。

「そうだよ。ナツキが泣くなら泣きたくなる。笑うなら俺も笑える。当然だろ？」

笑顔で言いきられた。頬が熱くならないほうがおかしい。心臓まですくばく鳴っている。

おそるべし、フェミニスト。やっと取り戻した両手で頬を押さえ、ウィルを睨む。

「……私は今、ウィルのほうが怖い」

不思議そうに首をかしげた彼にそれ以上言えず、夏妃はため息をついた。

結局、雨が止んだころには日が暮れかけていて、夜が明けてから村へ戻ろうということになった。ウィルの天然発言で、夜明かしはなかなか（一方的に）気まずいものとなったが、それはまた別の話。

夜明けとともに崖の上に出たところで、夜通し探してきてくれたらしい村の大人たちと合流した。みんな夏妃とウィルの肩をたたいて、ここから喜んでくれた。申し訳なさとしさとで、夏妃は彼らに頭を下げた。

そして、村に着くなり、待ち構えていたシルエラに飛びつく勢いで抱きしめられた。無事でよかったと泣く彼女に何度も謝り、抱きしめ返して夏妃も少し泣いた。しばらくすると、シルエラは顔をくしゃくしゃにしたまま微笑んで言った。

「おかえり、ナツキ」

胸に温かいものが広がる。頷いて、心から答えた。

「ただいま」

やっと、この世界を受け入れられた気がした。

村にようやく帰ってきた夏妃は、村長の家に連れて行かれ、食事や入浴で散々シルエラに世話を焼かれた後、オレアたち若夫婦の部屋のベッドを借りて眠った。

夜通し満足に眠れず、疲れ果てていたこともあって、枕に頭をつけるなりすぐに意識がなくなった。次に目を覚ました時には、窓の外はもう日が傾き始めていた。

ぼんやりと毛布にくるまったまま窓の外の空を眺めていると、くぐもった怒鳴り声が聞こえてきた。これは、シルエラのものだ。今度ははつきりと目が覚め、ベッドから降りて枕元に用意してあった衣服に着替える。

寝室のドアを開けると、よりはつきりとシルエラの声が聞こえた。

「まったく、情けないよ、私は。いい年をした男どもがこそそと、女の子を寄つてたかつていじめてたなんて！」

これはどう考えても夏妃のことだ。慌てて廊下を進み、声のする客間のほうへ急ぐ。そのドアの前で、オレアが困り果てた顔をしていた。彼女は夏妃に気付くと、表情を和らげて微笑んだ。

「あら、おはよう。調子はどう？」

「大丈夫です。ありがとうございます。あの、シルエラさんは……」

オレアは頬に手を当てて苦笑した。

「これまでの経緯をウィルやおじいさまに聞いたお義母さまが、怒

り心頭でね。すごい剣幕で、だれも仲裁できないのよ」

「そんな……。私のせいなのに」

うつむくと、オレアは首を振る。

「いいえ、私もお義母さまに賛成よ。女の子を泣かせる男なんて最低だわ。あの人たちの自業自得です」

笑顔でさらりとそう言い切った。

おっとりさんだと思っていたが、意外とはつきりものを言う。気性はむしろシルエラに近いのかもしれない。彼女をうかつに怒らせるような真似は避けよう、と胸に刻む。

「とりあえず、入ってみても大丈夫ですかね……？」

「あら、意外にたくましいのね、ナツキちゃん。じゃあ、このお茶もお願いしていいかしら」

ごく自然に抱えていたトレーを押し付けて、助かったわあと言いながら行ってしまった。

うん。やっぱり一筋縄ではいかないタイプだ。

なんとなく敗北感を覚えながらドアを押し開けると、奥のテーブルセットにウィルとエルヴァが座り、シルエラが仁王立ちでこちらに背を向けていた。夏妃に一番最初に気付いたのはエルヴァで、彼は心底ほっとしたように笑みを見せた。

「ああ、ナツキ。もう身体はいいのか？」

その途端、シルエラが振り向き、一気に甘やかす声になって駆け

寄ってきた。

「起きて大丈夫かい？ もっとゆっくりしていてもよかったのに」  
「いえ、さすがにこれ以上は体に悪いと思うので。これ、お茶です」  
「すまないね」

エルヴァが立ち上がり、トレーを受け取る。それをテーブルに置くと、夏妃に長椅子を示した。

「座らないか。話したいこともある」  
「これ以上この子に何を……」

また臨戦態勢に入ったシルエラを、エルヴァが静かにさえぎった。

「シルエラ。確かにお前の言うことはもっともだが、これは私たちとナツキの問題だ。ナツキが私たちを許せず、罰したいというなら従おう。だが、お前がこの子を困ってしまったら歪むものもある。わかるな」

シルエラは何か言い返したそうだったが、結局は息を吐くだけで頷いた。

「……そうだね。私は出てるよ、ここにいたら口をはさんじまう」

部屋を出ていくシルエラを、夏妃は呼び止めた。

「シルエラさん。ありがとう」

彼女は振り向き、力強く微笑んだ。

「また泣かされたら呼びなさいな。私がぶん殴ってやるよ」

「うん。でも大丈夫、自分でなんとかするよ。一回くらいむかつく相手を殴ってみたいし」

その意気だよ、と笑ってシルエラは部屋を出て行った。

ウィルがわざとらしく肩をすくめた。

「怖いなあ。ナツキまでシルエラに似てきたよ」

「あれ、だめかな。強くてかつこいいじゃない、シルエラさん」

「そう言われると、男としての俺の立場がないんだけど……」

急に落ち込んだウィルの向かいに腰かけて、お茶をそれぞれに配る。たぶんシルエラのためのものだったが、一組をもらって自分の前に置いた。

いただきます、とお茶を一口飲んだところで、エルヴァが口を開いた。

「ナツキ、君には本当に申し訳ないことをした。許してほしい」

頭を下げたエルヴァに戸惑っている間に、ウィルも続けた。

「元と言えば、このことを持ち出したのは俺だったんだ。ごめん」

大の男二人に頭を下げられて、夏妃は慌てた。カップを置いて、おろおろと腰を浮かせる。

「あ、あの、許すとかどうか以前に、私こそ謝らなきゃいけないし……。っていうか、もうお互いさまじやないですか」

「もう許すの？ ナツキこそ甘いんじゃない？」



ちらりと顔を上げて笑うウィルに、少しむつとする。

「どっちが。私、まだティリオのことで謝ってないし」

「そのことで君を責めるつもりはないよ。勝手に森に入ったあの子を助けてくれたのはナツキだ。ナイフのことも聞いたが、あの子自身が気にしていないんだ。君に感謝こそすれ、咎める者は誰もいない」

顔を上げたエルヴァがそう言い、夏妃は途方に暮れた。

「感謝って……」

ここまで好意的に解釈されてしまうと氣後れする。しかし、文句を言うわけにもいかないし、このままでは謝り合戦で収拾がつかない。夏妃は、食い下がりたい思いを飲み込むことにした。

「……わかりました。みなさんが私を許してくれるなら、それと相殺で私もふたりを許します。これでプラスマイナスゼロですよね？」

エルヴァとウィルは顔を見合わせ、苦笑した。

「なるほど。それなら私たちもこれ以上しつこくは言えないな」

「そうですね」

ほっとして、椅子に座りなおす。もう一度両手でカップを包み込みながら、彼らを見た。

「だいたい、私だって謝られる理由はないですよ。ふたりは私を心配してくれたんでしょう？」

少し甘い香りのする、濃い色のお茶の水面を見つめながら唇をかんだ。

「それなのに、私は自分のことばかり考えてました。本当に、最低」

自己嫌悪を込めて呟く夏妃を、エルヴァがやわらかな声音で呼んだ。顔を上げると、金緑色の眼がじっと見つめていた。自然と背筋が伸びる、彼独特のまなざしだった。

「自分のことを優先しちゃいけないなんてことはないさ。君は君を大事にしてい」

「でも、もっとしっかりしないと、私……」

言葉がしばむ。エルヴァの瞳はどこまでも優しくかった。

「そんなに気負う必要はない。別に王様になるわけじゃないんだ。君が責任を持たなきゃならないのは、自分の命ひとつ。その責任をまっとうする以上の義務なんかないと、私は思うよ」

「命ひとつ……」

「そう。君だけの大事な宝物だ。誰にも譲ってはいけないし、誰かと比べなくていい。悩んで、時間をかけて、一秒一秒まで大切に使いなさい」

なんだか、泣きたい気持ちになった。指の先まで温まる心地がする。声が出せず、頷くので精いっぱいだった。

言葉がなくても、気持ちが通じているのがわかる。オレンジの光が射す部屋の中は、ひどく居心地が良かった。

やがて、甘い匂いとともにシルエラが部屋に戻ってきた。これは、と思い振り返ると、ずかずかと近づいてきた彼女は大きな皿をテー

ブルの真ん中に置いた。男二人の表情が凍りつく。

「これは……」

「もしかして……」

もしかしくなくても。

シルエラは満面の笑みで腰に手を当てた。

「私も何とか解決策を見つけようと思ってね。これでふたりを許すことに決めたのさ」

確かに、彼らには大きなダメージになったようだった。

夏妃には懐かしい、シルエラお手製の黒キルシェのケーキがそこに鎮座している。しかも、ワンホール丸ごと。

「これ全部、食べるの？ 丸ごと？」

心なしか涙目のウィルがシルエラを窺う。エルヴァはすでにあきらめ顔で彼の肩をたたいた。

「まさか嫌だとは言わないだろうね？」

完全に悪役の顔でシルエラが言う。夏妃は、こらえきれずにお腹を抱えて笑った。

「さすが、シルエラさん。今度ケーキの作り方教えてください。殴るよりも効果的そうなもの」

「ここに悪魔がもうひとり……」

げんなりした顔のウィルが頭を抱える。その彼に、シルエラがと

どめを刺した。

「そうそう、ウィル。今回のことはコルナリナに伝えるからね。詳しく、徹底的に」

力を込めて言われ、彼は声もなくテーブルに突っ伏した。心底憐れむ顔のエルヴァが、また彼の肩をたたく。いったいどんな女性なんだ、コルナリナさん。ものすごく興味がある。

嬉々としてケーキを切り分け始めたシルエラの後ろを通りぬけて、ウィルの隣にしゃがみこむ。突っ伏したままの彼に訊いた。

「ねえ、腕の怪我はいいの？」

彼は顔を横向けて、包帯を巻かれた腕を持ち上げて見せた。

「ぶちぶち文句言いながらも、ちゃんとシルエラが手当てしてくれたよ。半月もあれば完治する」

よかった。安堵の息をつく。もうひとつ伝えたかったことを、両手を口に添えて彼の耳元に囁いた。

「あのね。さつきまで眠ってた間、あの夢を見なかったの」

たまたまなのか、もう見ないで済むのかはわからない。それでも

「そうか。よかった」

「ほら、ナツキも座りな。いま、ティリオたちも呼んでくるからね」

笑って頭を撫でてくれる体温と、優しく夏妃を呼んでくれるあた

たかな存在が支えてくれるから。

夏妃はこの場所で、笑っていられるのだ。

〳某月某日、とある一室の会話〵

「黒龍の女の子？」

「そう。現れたらしいですよ」

ばらばらと、紙をめくる音に重なるように会話が交わされる。はじめの声が、それはそれは、と興味深そうに呟いた。

「本当なら面白いことだね。唯一無二の英雄の色の再来か。しかし、そんな報告は上がってきていなかったけどな」

「何とも不可解ですが、出生地も素性も不明のようですね。【九頭<sup>ノウエム・カサト</sup>龍】に数えられるシルウア島の長が保護しているそうですから、剣呑な存在ではなさそうですが」

「へえ、彼がねえ。ますます面白いな」

「そこで、私から提案があるのですが」

「うん、何かな？」

顔を上げた声の主に向かって、笑みをとともに提案を口にする。

「これは例の計画を起こす好機ではないですか？ シルウア島の長は、秋の定例会にこの娘を伴って城へ参内するはずですよ。彼女の存在は、知れば良くも悪くも注目を浴びる。ことを起こすのは早いほうがいいでしょう」

黙って聞いていた声の主は、紙をめくる手をぴたりと止めた。

「……なるほど。それはそうかもしれないね」

ひどく嬉しそうに頷くと、手を組み顎に当てて提案者を見た。

「いいだろう、実行を許可する。詳しいことは君に任せてもいいかな？」

「ええ、任せてください。またとない機会とこれ以上ない役者が揃うのです。手抜きなどいたしませんよ」

「ああ。頼むよ」

提案者が部屋を出ていくと、残った声の主は椅子を立ち、天井まである大きな窓の前に立って微笑んだ。

「楽しみだな。どんな娘なんだろうねえ」

晴れた空の下、とある一室で始まった物語を知る者は、まだいい。

薄が揺れる。空が高く、頭上を雲がのんびりと流れていく。

夏の景色とはもうずいぶん様子が違う。季節はすっかり、秋になつていた。

夏妃は、パンの最後のひとかけらを口の中に入れて立ち上がると、小川に近づいた。靴の下でごろごろする石に足を取られないように注意しながら、水際にしゃがみこんだ。

川面は日射しを反射してきらきらしていて、つい触れてみたくなる。手を浸すと、ひんやりした水がさらさらと手のひらを撫でて流れていった。小川は、川底まではつきりと見えるほど澄んでいる。

「こんなにきれいな川って見たことないかも。ねえ、この水って飲めるかな」

手を浸したまま振り返り、連れを呼んだ。彼はどこからか流されてきたもののなか、大きな流木に座って地図を広げていた。夏妃の声に顔を上げ、首を傾げた。

「うーん、海からは離れたし、近くに集落もないみたいだから大丈夫かな？ あ、でも上流に温泉があるからあんまり飲むには向かないかも」

「温泉？ あるの？」

後半は地図に目を落として答えたウィルの言葉に、つい声が弾んだ。

手の水を切って彼の近くに戻る。地図を横から覗き込むと、彼はその一画を指差した。



「この辺り一帯は温泉の湧く地形なんだよ。王都も一部入るね」  
「へえー。じゃあ、もしかしたら入れるかもしれないね」

異世界の温泉かー。楽しみだなー、と思っていると、ウィルが笑った。

「ご機嫌だね、ナツキ。今朝はかなり戸惑ってたみたいだったから心配してたけど、楽しそうでよかった」

夏妃は呆れて、のほほんとした彼の笑顔を見た。

「あんなの、戸惑うに決まってるじゃない。だいたい、遠出するその当日に話すなんて非常識だよ」

「そっか。ごめん」

にこにこ謝る彼に、誠意が見えない、なんていっても無駄なこととはもうわかっている。

今朝のこと。

夏妃はこつこつと、窓をたく音で目を覚ました。寝ぼけ眼で体を起こし、ベッドの枕元にある窓を振り向いた夏妃は、目を見開いた。

「な……」

驚いた、なんてものじゃない。かわいなお姫様でもないというの

に、あやうく気を失うところだった。窓の外から覗き込んでいるのは、巨大な龍の顔だったのだ。

悲鳴を上げる直前で、見覚えのある焦げ茶の瞳に気が付く。一気に力が抜け、その眼をじつと見た。

「ウィル、だよな？」

「そうだよ。おはよう、ナツキ」

いたつてのんきに挨拶され、それどころじゃない、と相手を睨む。目が覚めるなり、こんな巨大生物に出くわしては寿命が縮む。文句を言おうと窓の前に立つと、それより先にふと疑問が口をついた。

「なんか、珍しいね。森の巡回以外で変化へんげしてるとこなんて、見たことないのに」

しげしげと翡翠色をした巨体を仰ぐ。そもそも、休憩時間に会うだけだから、巡回のときでさえ彼の変化は目にしたことがない。こうして見るのは、初めて会ったとき以来だった。

しかし、見れば見るほど不思議だ。変化といっても体積も外見も明らかに変わりすぎだし、どういうからくりなのか、はなはだ疑問だ。宝石みたいにつやつやした鱗をじつと見ている夏妃を、ウィルが不思議そうに呼んだ。

「ナツキ？」

「え？ ああ、ごめん」

触つてみてもいいかなあ、などと考えていた思考を引き戻され、夏妃は彼の顔に目を戻した。と言っても、視界いっぱいの大きさのそののどこを見ていればいいのかわからない。

「ねえ、変化解かないの？」

窓ぎりぎりまで頭を下ろしてくれているとはいえ、見上げているのに変わりはないので首が痛い。それに、彼のほうも平屋の窓に合わせたこの不自然な体勢はきついと思うのだが。

しかし、彼は小さく首を振った。

「いや、ちょっと急ぎだからこのままで」

「急ぎ？ 何かあったの？」

まさか緊急事態か、と顔をこわばらせた夏妃を安心させるように、ウィルは穏やかに言った。

「深刻なことじゃないよ。早朝に、村長に知らせがあつてね。定例の報告会の日時が決まったんだ」

報告会。龍の王と各地の長たちが開くという、年に2回の会議のことだ。この秋の会議では、夏妃のことについても報告されることになっている。

「会議は3日後、王城で行われる。村長は知らせを受け取ってすぐに王都に発ったよ。俺たちもそれを追う」

「ま、待ってよ。まさか今日？」

「うん。今から」

あっさり言われても、心の準備が。

というか、開催も3日後とか急すぎないかそれ。

「だって、着替えとかいろんな仕度とか、どうするの？」

ウィルはぱちぱちと瞬きして、ああ、とやっと気が付いたみたい  
に答えた。

「なんの仕度もいらないよ。着替えとか諸々は王城で用意されるか  
ら心配いらない。手続きに必要なことは村長がやってくれるし、俺  
たちは身一つでいいんだよ」

「ええー……？」

ありがたいことはありがたいが、なんともおおざっぱだ。

「でも、王都に着くまでの間とか……」

「俺たちが変化して飛べば、途中休憩をはさんでも昼過ぎには王都  
に着くよ。シルエラが弁当を用意してくれてるし、ちよつとした散  
歩だと思えばいい」

納得いかに食い下がつてみたが、またもあつさりと退けられた。  
散歩って……。いくらなんでも能天気すぎる。

脱力した夏妃の様子をどう取ったのか、ウィルは慌てて付け足し  
た。

「あ、もちろんナツキは変化できないし俺が連れてくよ。大丈夫、  
ゆっくり行くから怖くないって」

「いや、そういうことじゃなくて……。まあ、いいや」

ついには諦めて、身支度をすることにした。

顔を洗い、オレアのお下がりの中で一番気に入っている、シンプ  
ルな深緑色のワンピースタイプの服に着替えた。続いていつもの肩  
掛けかばんに最低限必要なものを詰め込んでいると、ふと棚に入っ

ている小さな冊子が目に入った。

あの夕立の日、肌身離さずかばんに入れていたせいで、一緒に川に落ちてしまった教科書だ。シルエラが丁寧に乾かしてくれていたが、ふやけてよれよれになってしまったそれ。夏妃は手に取りかけやめた。タンスの奥にしまった元の世界の衣類にも手を付けず、引き出しを閉める。

元の世界とのつながりは、どうしても捨てられない。それでも、縫い付いてばかりもいられないことを、今はもうわかっていた。そして大切なそのつながりは、ウィルと暮らすこの家に残していくことがふさわしく思えた。ここもまた、自分の帰る家だから。そう決めた。

夏妃はかばんをかけて部屋を出る。短い廊下を抜けて玄関を出ると、巨大な龍の姿のウィルとともに、籠を手を持ったシルエラが待っていた。

「おはようございます、シルエラさん」

「おはよう、ナツキ。急なことだけど、気を付けていくんだよ」

挨拶を交わし、軽食が入っているという籠を受け取る。お礼を言う夏妃の肩に、シルエラは真剣な顔で手を置いた。

「村長やうちの旦那もひと足先に行ってるし、大丈夫だとは思ってどね。何かあったらウィルを盾にして逃げるんだよ。いいね」  
「盾にするんだ？」

苦笑する気配のウィルを見て、彼女は当然とばかりに頷いた。

「そうだよ。あんたは火でも水でも槍でも魔術でも、ナツキの代わりを受け止めな。でなきゃ私が許さないからね」

「どっちにしろ、俺だけひどい目に合うんじゃないか……」

……それが、旅立ちの顛末。

「あとどのくらいで着くの？」

地図をたたみ始めたウィルに問いかけると、彼は少し空を見上げて答えた。

「うーん、太陽の位置からして今が昼前くらいだから……。あと2時間ってとこかな」

「そんなに……」

ちよつとげんなりしてしまう。

村のあるシルウア島を朝に出発して半日ほど、ここまで変化したウィルに連れてきてもらったわけだが、なかなか過酷な道中だった。

はじめは龍に乗れるなんてそうそうない、と内心浮かれていたのだが、実際乗ってみてわかった。正直言って、あんまり乗り心地がよろしくない。

そもそも、人間が乗る生き物じゃないのだから仕方ないのだ。鱗がつるつるで掴みどころがないのも、高空を飛ぶために手がかじかむのも、大きな翼の羽ばたきで落ち着かないのも。

「でも、せめて鞍くらいほしいなあ……」

「え？」

「なんでもない」

冷たく硬い鱗の上に座りっぱなしなのでお尻が痛いのだが、さすがにそんなことは言えない。馬扱いなんかしたらさすがに怒るだろうし。いや、怒らずにへこむか、彼の場合。

それにたぶん、これ以上を望むのは贅沢というものだろう。だいが最初のほうで音を上げて、普通に地上を歩いていけないのかと聞いてみたのだ。その答えは、「できなくはないけど、3カ月はかかるよ」とのこと。

……なるほど。高速旅客機<sup>ウィル</sup>万歳。時間を買うには多少は我慢も必要だ、と耐え忍ぶことを決意したのだった。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

立ち上がったウィルにそう宣言されると、つい腰が引けるくらいには苦行の空の旅。まだ先は長い。

平和な秋の空を見上げて、こっそりため息をついた。

龍の王のおわす王都には、これまた名前がないらしい。王都も一つきりだから必要がないとか、まあそういうことなんだろう。

王都と言われて夏妃が抱いていたイメージは、やはり定番と言って差し支えない、どーんとそびえるシンデレラ城とばりばりの西洋風の街並み、みたいなものだった（城なんか見たことがないのだから想像力に乏しいのは仕方ないと思う）。

だが、実際に目にした王都はそれとはまったく違う。180度というより225度違う、というのがふさわしいくらいの微妙なずれっぷりだった。

まず、大通りの正面に聳え立つそれに、夏妃は釘付けとなった。

「おつきい……」

ぽかんと口を開けて見上げるそれは、視界いっぱい巨大な岩山だった。荒々しい岩肌がのぞき、ふもとには色づき始めた紅葉が見える様子は、なんだか日本で見たことがある風景のような気がする。それでいて、山の下に寄り添うように広がる町は洋風だ。だからといってお互いにアンバランスな印象はないのが、なんとも不思議だった。

「ナツキ、ぶつかるよ」

ウィルに腕を引かれて、往来の真ん中で誰かに衝突しそうになるのを免れる。ごめんと謝って、意識を下界に引き戻した。見上げたせいでずり落ちかけていたフードを直す。髪を隠すために必要なの



だが、視界が狭まるし少し不便だ。

夏妃は王都の手前で変化を解いたウィルとともに城下町に入り、繁華街と思われる場所を歩いていた。

町の目抜き通りには市があり、たいした混雑はないものかなり賑やかだった。建物は村でも見た木組みの造りで、統一感のある高さで色合いが軒を連ねる。

鮮やかな織物や見たことのない果物が陳列されていたり、どこからか香ばしい匂いが漂ってきたり、つい興味を惹かれてきよるきよるしてしまう。考えてみれば村から出るのは初めてで、見るものすべてが珍しかった。

「すごいね。たくさんありすぎて目が回りそう」

「いつ来てもにぎやかだな、ここは。自分が田舎者だってすごく実感する」

苦笑いするウィルは、どこか懐かしそうに通りを見渡していた。

「ウィルは、王都に来たことがあるんだっけ」

「小さい頃だけど、何度かね。母の付添いだったから好きなところを見て回れたためしなかったけど」

遠い目をするウィルの口元には自嘲の笑み。どことなく哀愁が漂っている。

なんだが、突っ込んで訊かないほうがよさそうな雰囲気だった。空気を讀んだ夏妃は、ところで、と本来の目的に思考を戻した。

「エルヴァさんたちとの待ち合わせってこの辺なの？」

「うん、この通りのはずなんだけどな。えーと、【銀の杯】<sup>こがすき</sup>っていう宿屋だよ」

宿屋宿屋、と通りを見まわしながらしばらく歩いていると、ひとつの看板が目に入った。とっさにウィルの袖口をつかんでそれを指差す。

「あ、あれじゃない？」

鉄の軸にぶら下がる木製の板に【銀の杯】と店の名前が書かれ、その下に杯の絵も描かれている。ウィルも見つけ、頷いた。

「間違いないね。すごいな、読みはもう完璧？」

「たくさん勉強したもの。看板くらい読めるよ」

ちょっと大げさに胸を張ると、えらいえらいと頭を撫でられた。

完全に子ども扱いだが、褒めてもらえるのは単純に嬉しい。

弾んだ気分のまま宿屋に入ると、右手のカウンターから声をかけられた。

「いらつしゃいませ。お泊まりですか、お食事ですか」

愛想のいい営業スマイルを見せているお姉さんもまた、龍なのだろう。彼女も珍しい色彩を持っていた。

結い上げた髪は青灰色で、瞳は深い藍色。すらりとした立ち姿といい、かなりの美人だ。思わずうつと見とれた夏妃の横でウィルが用向きを告げると、お姉さんにはっこり頷いた。

「お待ちしておりました。ご案内いたします。では、こちらへ」

お姉さんの先導を受けて、広い空間に並べられたテーブルや椅子の間を通り抜ける。たぶんここが食事用の場所なのだろう。廊下を

進み、突き当たりのドアの前に立ったお姉さんがノックする。

「お連れ様が御着きになりました」

「はいはい。ご苦労様だったね」

声とともに、壮年の男が顔を出した。上背がありがっしりとした体格だが、夏妃とウィルを見つけて破顔する表情に威圧感はない。彼の名前はバザルト。シルエラの夫であり、次期村長と目される存在だ。

「さあ、入って。ああ、ふたりの分のお茶を頼むよ」

かしこまりました、と答えたお姉さんが立ち去りドアが閉まると、バザルトに促されるまま部屋の奥のソファに座った。

部屋はこじんまりとしてはいるが、南向きの窓から光が入って明るく、調度品も木製のもので統一されていて暖かみを感じる。隅々まで掃除が行き届いているようで、居心地もよかった。

備え付けの菓子入れにあしらわれた小鳥の意匠を眺めていると、入り口とは別のドアが開いた。それは別の部屋につながっているらしく、現れたエルヴァがおや、と笑う。

「朝早くから大変だったろう、ふたりとも。昼食はとったかい？」

「はい。シルエラさんがお弁当を持たせてくれましたから」

夏妃が答えると同時に入り口のドアがノックされ、お茶を持ったお姉さんが現れた。バザルトが受け取り、お姉さんが笑みを残して退室すると、向かい側に座ったエルヴァが切り出した。

「急なことですまなかったね、ナツキ。驚いただろう」

否定もできず、苦笑いした。

「まあ、そうですね。でも、いつかは来なければならなかったんですし」

「こんなに急な召集は珍しいんだがね。まあ、城に入るのは明日だし、今日はゆっくり休んでくれ」

「あ、じゃあ後で外に遊びに行ってもいいですか？」

こんなことでもなければ、王都を歩く機会なんてないかもしれない。期待を込めてエルヴァを見つめると、彼が答えるより先にウィルが口をはさんだ。

「ひとりで？　王都はじめてなのに、ナツキをひとりにするわけには……」

「ストップ。ウィルは過保護すぎるってば。私だって馬鹿じゃないもの、大きい通りを選ぶしフードも外さないようにするよ」

彼のこういうところには慣れつつあるが、いい加減子ども扱いは勘弁してほしい。夏妃もふざけて子どもっぽい態度をとることはあるが、こういうことは別だ。これではフェミニストというより、心配性な母親と変わらない。

それでも洩る気配の彼に、エルヴァが口を添えてくれた。

「王都は治安もいいし、王都の主要な通りには警邏けいらが常駐してる。子どもだけで出歩くのも珍しくないくらいだ。日が暮れる前までに戻るなら、問題はないんじゃないか？」

「……わかりましたよ」

悄然とするウィルに申し訳なくなり、慌てて言い添えた。そうい

えば彼は、シルエラの制裁宣言を受けていたのだった。

「絶対、日が暮れる前には帰るから。危ないことはしない。約束する」

「信用してるよ」

ウィルが苦笑を返し、エルヴァが話を戻した。

「とにかくそれも、話が済んでからだ。君たちに謁見までの流れを説明しよう」

重要な話が始まる気配に、背筋を伸ばす。

エルヴァは両手の指を組んで膝に置き、夏妃を見つめて話し出した。

「さっきも言ったとおり、城に入るのは明日。私はその後煩雑な手続きに時間を取られるが、君たちは翌日の会議まで待機となるだろう。定例会については話したね？」

「はい。龍の王様に会って、いろんな集落の長が半年間の報告をする会議ですよ」

確認すると、彼は頷いて続けた。

「各地にある集落の数は現在24。基本的に4種族それぞれに分かれているけれど、すべての種族が混じった集落もある。この王都のようだね」

言われてみれば、通りを歩く者たちの色彩は多様で、目がちかちかするほどだったことを思い出す。

「それなら、王都にも長がいるんですか？」

「王都は王の直轄地だから、王が長ということになるだろうね」  
「そっか。じゃあ王都は25カ所目の集落なんですね」

エルヴァはよくできました、という表情を浮かべて頷いた。

「その通り。そして、その長でありすべての龍族を統べる王がいらっしゃるのが、王城だよ」

王城。この王都に入った当初思い描いていた城らしいものは、どこにも見かけなかった。

「王城ってどこにあるんですか？」

思ったままを訪ねると、エルヴァはからかうような笑みを浮かべた。

「おや。ナツキはもう目になっているはずだよ」  
「え？」

まったく覚えがない。王都に着いてからの記憶をひっくり返してみても分からず、眉を寄せていると、ウィルが笑いながら答えをくれた。

「王都に入る前から見えてただろ？ あの岩山だよ」  
「え……、山？」

山が城？ さっぱり意味が分からない。

「あの山の頂上あたりは、岩肌を掘って建物が作られている。岩山

そのものが城なんだよ」

エルヴァの説明を聞いても半信半疑だった。確かに、そういう造りの家が遺跡となつて残る世界遺産の話聞いたことがある気がする。しかし、城なんていう規模のものは可能なんだろうか。今考えたところで、わかるものではないけれど。

そしてふと、不穏な単語に気が付いて顔がこわばった。

「……ちよつと待ってください。『山の頂上』？」

恐る恐るエルヴァを見ると、彼はごくあっさりと頷いた。

「そう。城は山の上にある」

「つてことは、そこに行くには」

「山登りだね」

ウィルに嫌な予感を肯定され、とつさに「聞いてない!!」と叫びそうになった。自慢ではないが体力にはまったく自信がない。

テーブルに沈みかけ、はつとして隣りのウィルを仰いだ。

「そうだ、登らなくたって変化すれば飛べるじゃないの」

「行き先は城だよ？ そんな不敬な真似をしたら首が飛ぶって」

起死回生の提案だったつもりが、肩をすくめたウィルにあっけなく却下される。

夏妃はまだ納得がいかない。

「不敬って、どうして？ お年寄りや小さい子ども相手でもそんなことを言うの？ それってすごく偉そうだよ」

それこそ不敬なことを言う夏妃にバザルトが目を剥いたが、ウィルとエルヴァは怒るところか笑い出した。

「はつきり言うようになったね」

「当然の意見だと思うけど……。だって、嫌な感じがするじゃない。そういうの」

面白がる口調のウィルに言い返す。まあ、運動嫌いだから八つ当たりも入ったのは認めるけど。それに、回りくどい言い方は苦手だ。

「確かに、そういう一面があるかもしれないな。だが、これは龍の王に対する、私たちの敬意の表し方でもあるんだ。強制されているからそうするのではなく、王に最大の敬意を払いたいからそうしている。わかってもらえるかな」

真摯なエルヴァの表情から、それが彼の心から言葉なのだと感じた。思わず頭を下げていた。

「……ごめんなさい。知りもしないのに、失礼なことを言って」「謝る必要はないさ。龍として暮らしてほしいと言っただけ、考え方まで押し付けるつもりはない。君が自分の目で見て、思うことを信じなさい」

エルヴァの言葉はいつも公平で優しい。しかし、決して甘やかすこともなく、夏妃にすべての判断を任せようとする。そんな傾向はウィルにもあった。

それは、叱りつけ強制する以上に厳しい態度かもしれない。それでも心細くならないのは、彼らの信頼を感じるからだ。

「……はい」



夏妃は、それに応えたい。その思いを声に込めた。

明日の登城の話を聞き終え、まだ渋る顔のウィルを残して宿を出た頃には、もう空の色は昼から夕方へと移り始めていた。約束もあるので、本格的に日が傾く前には戻らなければならない。時間もないことだと、喧噪も賑やかな大通りを歩き出す。

いくら歩かないうちに、エルヴァに言われた通りの警邏<sup>けいら</sup>の姿があちこちに見えた。髪や瞳の色はさまざまだが、その誰もが屈強そうな男ばかりだった。

紺の地に白の縫い取りの制服の彼らに気付くと大人たちは挨拶し、子どもは彼らの足元にまわりついたりする。かなり頼りにされている存在だということは目に見えてわかった。

それに安心して手近な店の軒先に目を向けると、鮮やかな組み紐を編みこんで作られた小さなアクセサリーが並んでいた。銀の細い鎖とさまざまな色の紐が螺旋に絡まり、真ん中にはコイン型の飾りがある。たぶんペンダントだろう。

つい見入っていると、売り子のおばさんが愛想よく声をかけてきた。

「こんにちは、お嬢ちゃん。銀守りを見るのは初めてかい？」

「銀守り？　これ、お守りなの？」

瞬きして問うと、おばさんはそうだよと頷いた。

「銀は龍にとって命の色。コインの中に、いろんな色の小さい石が埋め込まれてるだろう？　身に着ける者の瞳の色と同じ色の石がついた銀守りを持つと、災いを退けて命を守ってくれるのさ」

龍にもお守りを頼りにする風習があるのか、と感心した。一つを手にとって、おばさんは親切に説明してくれた。

「石と合う紐を選んで、一つ一つが手作りなんだよ。同じ石はないから同じ銀守りもない。ひとりにひとつのお守りってわけだ」

「へえ、すごい。綺麗だね」

興味津々の夏妃の様子に気をよくしたのか、おばさんがここにと言った。

「お嬢ちゃん、この辺の子じゃないだろう？ 定例会の出席者の付添いかい？」

言い当てられて驚いたが、彼女の口ぶりからするとそういうことは珍しくないのだろう。素直に頷くと、目を細めて笑う。

「えらいねえ。よし、おばちゃんがおまけしてあげよう。うんと安くするよ。さて、お嬢ちゃんにはどの石が良いかねえ」

じつと夏妃の眼を覗き込み、おや、と目を丸くした。

「黒に近い綺麗な色をしているねえ。なかなかお目にかかれるもんじゃないが……」

ぎくりとし、慌てて身を引いた。

「い、いえ、お金は持ってないんです。嬉しいんですけど、買い物はまた今度……」

「あら、いいじゃない。お姉さんが奢るわよ」

逃げ腰になったところで、明るい声が割って入る。振り向くと、見覚えのある美人がいた。

青灰色の髪と、藍色の瞳。夏妃を見下ろす彼女の綺麗な笑顔を見て、思い出した。

「あ。宿屋の……」

「当たり前。【銀の杯】の看板娘、ミカと申します」

おどけて丁寧な頭を下げて見せ、おばさんに屈託なく話しかける。

「おばさん、私が払うわ。この子、うちのお客さんなの。エルヴァ様のお付きの子なのよ」

「あらまあ、【九頭龍<sup>ノウテム・カワト</sup>】様の！」

驚いた様子でまじまじと見られてたじろぎながらも、とにかくミカに向かって首を振る。

「そんな、買ってもらうわけには……」

「いいのいいの。そんなに高価なものじゃないんだし。あ、その左端の石が良いんじゃないかしら」

指差された銀守りの石は黒に近い深い茶色で、確かに夏妃の瞳の色に近かった。さつさと支払いが済み、はいどうぞと差し出されたペンダントを前に、途方に暮れた。

「困ります……」

こんなことなら、お小遣いを断らずにいくらかお金をもらってくれば良かった。

「あの、戻ったらお金は払いますから」

「野暮なこと言わないの。女の子はもらえるものはもらっておけばいいのよ」

自分こそ男性からなんでももらえそうなあでやかな美人だというのに、言うことはやたらと男前だ。結局は押しに負けて受け取ってしまった。

だが、やはりこういうのは何か違う気がする。

「ありがとうございます。でも、ただ物をもらうのは私の主義に反します。お手伝いでもなんでも、なにか私にお返しできることはありませんか？」

これだけは譲れない、という顔でそう言うと、ミカは面白そうに夏妃を眺めた。

「へえ、いいね。そういう子好きよ。名前、なんていうの？」

夏妃です、と教えると、機嫌のいい猫みたいに目を細めて笑う。

「じゃあ、ナツキちゃん。ちょっと時間をつぶすのを手伝ってくれない？ 今日、いつも一緒に休憩に入る子が休みで暇だったの」

彼女は夏妃の手をつかむと、おばさんに手を振って歩き出した。通りをすいすいと進むミカに引きずられるように歩きながら、何とか訴える。

「あの、日が暮れるまでには宿屋に帰りたいんですけど」

「大丈夫、そんなに長くは付き合わせないから。小腹空かない？」

この先おいしいワッフルのお店があるんだけど」

それは、お返しを申し出た意味がない気がするのですが。  
見かけは近づきがたく思えるほどの美人なのに、なんとも押しの強い人だ。シルエラを思い出して、なんだかほだされてしまう。

少し歩くと小さな屋台が出ていて、甘いにおいがしていた。

「買ってくるね」と言って屋台に近づく彼女に残された夏妃は、まだぼかんとしていた。手のひらの上のお守りを見下ろして、どうしたものかと考える。

とりあえずは買ってもらったものだし、身につけるのが礼儀というものだろう。幸い、鎖の部分は大きめにとられていて、頭からそのまま通せそうだった。この往来でフードを外すことはできないので、助かった。

フードをしたまま首にお守りを通したところで、両手にワッフルを持ったミカが戻ってきた。

「お待たせ。あ、着けてくれたんだ？ うん、似合う似合う」

花もほころぶ笑顔で差し出されたワッフルは、食べ歩きができるよう薄紙に包まれていて、生地の間にはカスタードっぽい色のクリームと淡いオレンジ色の果肉がはさんである。

基本的に甘いものには目がない夏妃は、つい戸惑いも忘れて目を輝かせた。

「わ、おいしそう。この果物はなんですか？」

「これは、アルビコツカの実。砂糖で煮詰めてあって美味しいよ。私のおすすめ」

言いながら近くにあつたベンチに腰掛け、さつそくかぶりついている。

夏妃もその隣に座ると、いただきます、と生地の端のほうをかじった。記憶にあるワッフルの生地よりは堅めだけれど、厚みがあつてふわふわしていて美味しい。ミカおすすめのアルビコツ力は、桃に味が似ているけれど、砂糖の甘さの中に酸味があつた。

「ほんとだ。ワッフルに合いますね」

「でしょう？ 旬の時期なら生で入ってることもあるんだけど、私はこっちのほうが好き」

嬉しそうに言って、夏妃を見る。

「しかし、幸せそうに食べるねー」

「幸せですもん。やっぱり街だと美味しいものがあっていいですね」

心の底からそう言うと、ミカは笑ってまたワッフルをぱくつきながら話し出した。

「うん、この通りなんかは美味しいものが充実してて、休憩時間には最高ね。王都は初めてなんでしょう？ 銀守りも知らないくらいだし」

「はい。まあ、付き添いで……」

詳しく話すわけにもいかないもので、どうしても言葉を選ぶことになる。ちらりとミカを窺うと、彼女と目が合った。ふふ、と笑う。

「やっぱり警戒してる？」

肯定するのは躊躇われたが、さばさばした彼女の口調に背を押さ

れるように頷いていた。

「……正直に言えば、多少は。ほぼ初対面ですし」

「そうだよねえ。いきなり『それ買ってあげる』なんて言って引きずってきたら、怪しさ全開だわ」

からからと笑う彼女にそれを悪いと思う様子はなさそうだが、毒気を抜かれて苦笑した。

「男の人だったら全力で断ってましたね。でもミカさんは、王城の認可があるっていう正式な宿の店員さんだし。まあ、危険はないだろうなって」

「しっかりしてるなー。さすがはあのエルヴァ様が、お付きに選んだだけのことはあるってことかな」

エルヴァをよく知っているような口ぶりに、首を傾げる。

「エルヴァさんとは、親しいんですか？」

「とんでもない。定例会のたびに利用してくれるお得意様ってだけよ。それでもなくてもあの方は、【九頭龍】ノウエム・カプトのおひとりに数えられる有名なお方だし」

「あの……、さっきのおばさんも言っていたけど、そのノウエム・カプトってなんですか？」

訊ねると、彼女は綺麗な藍色の眼を丸くした。

「あれ、知らない？ 龍族の長の中でも、とくに功績があつて王の信頼が厚い九頭の長をそう呼ぶの。公式の場での発言権もあるし、王様の覚えもめでたいってだけですごいことだもの。かなり有名よー」



ばかんとして聞きながら、どこか納得もしていた。間近で見えても、エルヴァは只者ではない雰囲気だったからだ。

ミカはそれに、と笑う。

「私、個人的にもエルヴァ様のファンなのよね。すごく魅力的な方でしょう?」

「ええ、それはもちろん」

深く同意して頷いた。彼の雰囲気のある佇まいには、憧れを通り越して畏敬の念さえ覚える。

「ナツキちゃんと一緒に王城に参内するんでしょう? いいなあ。王城なんて、庶民の憧れよ?」

自分も庶民のはずなんですけどね、と思いながら苦笑いする。

「でも、歩いて頂上まで登らなきゃならないって聞いてびっくりです。迷惑をかけないようにしないと……」

思い出したら、気が重くなってきた。何が悲しくて異界で山登り。たそがれていると、ミカがさりと云った。

「大丈夫よ。熊が出てても衛士がいるし、崖から落ちても救護用の小屋があるから」

「熊!? 崖!?!」

のけぞる夏妃に、ミカは「あれ?」という顔で首を傾げた。

「あの山、割と険しいから10年に一回くらいそついう事故がある

んだけど。……言わないほうが、良かった？」

正直、聞きたくなかった。

勝手に日本の観光地的な登山道をイメージしていた自分が悪いの  
だろうけど、まさかそんなに険しい道のりだとは。っていうか、そ  
んなところを客に登らせるって、ますますどうなんですか、王様。

「まあまあ。基本的に龍族に喧嘩売る獣はいないし、お付きの衛士  
が付くから危険な道は選ばないわよ」

励ますように背を叩かれ、ますますがつくりする。明日を無事、  
乗り越えられるだろうか。……自信がない。

「元気出して！ そうだ、おわびに穴場の足湯教えてあげる。空い  
てるし景色もいいし最高のよー」

「……足湯？ 温泉？」

「そうそう。街の中にも温泉の湧くところがあってね、無料開放さ  
れてる足湯が結構あるのよ」

我ながら単純すぎるが、一気に気分は浮上した。明日の不安より  
今日の楽しみのほうが大事だ。

「わあ、入ってみたかったんです！」

「それはよかったわ。もちろん王城にも温泉が引かれてて、そりゃ  
あ立派な湯殿があるって噂でね。一度でいいから入ってみたいわー」  
「おお、立派な温泉！」

途端に、聳える魔王城にしか見えなくなっていた岩山が温泉テ  
マパークに見えてくるのだから、現金なものである。おそらくは、  
ミカの策略だったのだろうが。

よし、行こうか、とミカが立ち上がる。足湯につられて彼女に続き、隣に並んだところで、正面から強い風が吹いてきた。店の売り物のアクセサリーがしゃらしゃらと音を立て、通りの頭上に渡された飾り布が翻る。

あ、と思った時にはフードが煽られて後ろへずれかけていた。まだ残ったワッフルを手に使っていたせいで、とっさに押さえられなくて焦る。こんな往来で、髪を見られるわけにはいかないのに！

わたわたしている間に、頭にぽんと手のひらが載せられ、フードを押さえられる。顔を上げると、ミカと目が合った。

「大丈夫？」

「あ……、は、はい。ありがとうございます」

にこりと微笑んだ彼女に応え、慌てて片手でフードを深く被り直す。危なかった。

何事もなかったように歩き出した彼女の先導に従って歩き出しながら、夏妃は鼓動がいやに煩いうるさのを感じていた。

彼女の今の行動は、夏妃を庇うためのもの。事実、彼女のおかげで助かった。『黒色』は龍族の中で特別視されている。隠した黒髪を誰かに見られるわけにはいかなかった。

では、彼女は何故、庇ってくれたのか。

……隠しているものを、知っていた？

疑念は膨らむけれど口に出すことはできない。戸惑いながら彼女の背中を見つめることしかできなかった。

ミカは最初に言ったとおり、日没前に宿屋まで夏妃を送り届けてくれた。宿屋の前に着くなり、見慣れた長身を見つけて小さく呻いた。

「……げ」

「なにそれ。心配して待ってたのに、ずいぶんなご挨拶だね、ナツキ？」

こころなしに怖い笑顔のウィルに迎えられ、つい言い返す。

「過保護。平気だつて言っただじゃない」

「君が平気だろうと、俺が心配するのは俺の勝手だよ」

すまし顔で退けて、ふと夏妃の胸元に視線を落とした。目ざとい。何か言われる前に、コインを持ち上げて自己申告した。

「これ、ミカさんに買ってもらったの。王都を案内してくれたのもミカさんなんだよ」

振り向いてミカを示すと、ウィルは目を大きくして彼女を見た。

「……ミカ？ ミカって」

彼の視線を受け止めて、彼女は笑って小首を傾げて見せた。

「やっと思い出した？ お久しぶりね、ウィリディス。いつになったら気づくのかと思ってたわ」

夏妃まで驚いて、ふたりを見比べる。まさか、知り合い？

ウィルはまだ半信半疑みたいな顔で彼女をまじまじと見ていた。

「本当にミカ？ うわ、気づかなかった」

「薄情者。私はすぐに気づいたのに」

「だってもう50年は会ってなかっただろ。わかるわけない。だいたいお前だって、受付で会った時に何も言わなかったじゃないか」

ミカは悪びれもせずに笑顔で答えた。

「仕事中なもの。あなたがちゃんと気づくかどうか、興味もあったしね」

「相変わらず悪趣味だな……」

いやそうな顔をしていても、ウィルとミカの会話はいかにも親しげだった。

口が挟めずにいる夏妃に気づいたミカが、教えてくれた。

「ウィルと私は昔、ちょっとした間だけど遊び友達だったのよ。コルナリナ様もうちの宿を使っているね。暇してるこの子と遊んであげてたの」

「何、その上から目線。そっちが年下のくせに」

「年上を笠に着るところが子どものままね」

なるほど、中身はまんま子どもだが幼馴染みらしい会話だった。というか、今気がついたけど美男美女だ。絵になりすぎて気後れした。

なんだか居たたまれなくて、宿屋の入り口のほうに体を動かす。

「……あの、私部屋に戻ってるから」

「え？ 待って、ナツキ」

「いいわよ、ナツキちゃん。気を使わないで。私も仕事に戻らなきゃならないし。今日はありがとう、楽しかったわ」

綺麗な笑顔を向けられて、わけもなく後ろめたくなる。慌てて頭を下げた。

「いいえ、私こそごちそうになったしお世話になりっぱなしで。ありがとうございました」

「どういたしまして。また機会があったら遊びましょうね」

そう言っただけでひらひらと手を振り、ウィルとすれ違いざまに彼の腕を引いて何か耳打ちした。その仕草が大人っぽくて、どきりとする。彼女が去ってから、ウィルは何やら不機嫌そうに入り口を睨んでいたが、やがて夏妃を促した。

「入ろう、ナツキ。冷えるよ」

「……うん。ねえ、今何を言われたの？」

訊ねたが、ウィルは首を振った。

「くだらないこと。お節介なのも変わらないなあ、あいつは」

ため息をつくウィルがなんだか遠い。なんなんだろう、このもやもやした気持ちは。

いろいろあったけれど、楽しい一日として終わるはずだったのに。もやもやは消えないまま、夜ベッドに入ってから夏妃を悩ませた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0980z/>

---

希少保護生物指定女子。

2012年1月14日16時51分発行